

「【移民団】？ 【侵略軍】の間違いでしょう？」

思わず、アルⅡイクシルは本音で問い質してしまった。

「あたしも同じ事を思ったさ。だが、少なくともあちらさんはそう主張している」とボウデイツカは言い、いつもよりもさらにきつい目つきになった。

「それとな、賢者様。忘れているかもしれないが、あんたはその【『自称』移民団】と同じ穴の貉なんだぜ」

そう言われると、アルⅡイクシルも言葉に詰まる。

詳細はまだわからない。ボウデイツカにしたところで、海辺の漁師達からの報告を受けずに過ぎないのだ。

そも第一報はフアリアスに謎の大船団が現れたというものだった。

フアリアスとはティルⅡナⅡノグ南方の漁港であり、基本的に漁港以上の設備はない。一応、アルⅡイクシルもその港から上陸したのだから、アツザフル帝国との交流口と言えなくもない。だが、外航用大型船を直接接舷できるような設備はない。アルⅡイクシルたちも沖合に停泊する大型船から小型船に乗り換えて上陸したのだ。

そして、そこに外航用大型船団が突如出現したというのだ。

この船団がアツザフル帝国に所属していることはすぐに確定した。

そもそも、複数の大型船を建造する工業生産力と、それをティルⅡナⅡノグに到着させる地理的条件を兼ね備えているのはアツザフル以外にない。

この時点でボウデイツカの情報網に引っかかり、彼女はその正体を探らねばならなかった。

交易船の規模が大きくなったものでは？——という見方も当初はあった。実際アルⅡイクシルたちも交易船に乗ってやってきたのだ。

ところがその帝国船団には交易品の代わりにアツザフル人が大量に乗っており、彼らは次々と上陸を始めたのだ。

その数——およそ五万。

冗談ではないとアルⅡイクシルは思わず叫んでいた。この時点でのティルⅡナⅡノグの総人口は、はっきりとわかっているわけではない。だが、ボウデイツカの用意した最新資料を基に、アルⅡイクシルが下した計算結果は——推定百万人。

これでは最早彼らが【移民団】か【侵略軍】を議論する余地すらない。その人数そのものが暴威だ。

ティルⅡナⅡノグの人口が百万人というのは、今のティルⅡナⅡノグには百万人分の食料しかないということだ。住居、雇用についても同様である。

並々と水を注がれ、今にも溢れそうな杯に、さらに酒を注げばどうなるか？

……ある意味アルルクシルの仕事とは、その百万人という杯の器をさらに広げることだった。農地改革などはその典型である。だが、その成果は一夕一朝で出るものではない。

いずれはテイルルクシルノグも百万人の食い扶持を支えられるようになる。だが、今はまだ百万人分の食い扶持しかない。だから、百万人しかこの島には住んでいない。これは単純化した構図だが、それだけに動かしがたい事実でもある。では、この杯から零れた五万人はどうなる？

大人しく飢え死にしてくれるか、あるいは……

——殺しても奪い取る。

昔、アーチェンがよく口にしていた異世界の言葉が重くのしかかる。

しかもその五万人が『第一陣』に過ぎない可能性もある。

——報告によれば、その五万人の人口比率は著しく成人男性が多いという。歪な人口構成で、社会を維持できるわけがない。彼らは女性や子供といった『第二陣』『第三陣』を呼び寄せざるを得ない。

その上『第一陣』の大多数が成人男性ということは、彼らが【軍】として機能する可能性が極めて高いということだ。

「有罪確定だな」

同様の結論に至ったのだろう。ポウディツカは苦渋に満ちた——しかし、断固とした声音だった。

アルルクシルも藜杖を強く握りしめる。

「とりあえず、僕もフアリアスに行きます。直接確認しないことにはわからないことが多過ぎる」

「今は駄目だ。あんたの身が危うい」

「……どういう意味です？」

問い返すと、ポウディツカは大きく一つ溜め息をついた後、渋々語りだした。

「フアリアスにはシオラとイズルダという評判の美人姉妹がいる。あたしよりも二つ三つ年下で中々見所があるから、色々と目をかけていたんだ。いずれ義姉妹の契りでも結んでやろうかと考えていたぐらいでな。……ああ、この【『自称』移民団】の連絡も二人が残しておいてくれた線からのものだ」

「それがどうしたんです？」

珍しく結論を後回しにするポウディツカに、アルルクシルは多少苛立った。

だが、ポウディツカは気にも留めた容子もない。

「で、その二人が輪姦まわされたんだよ。その【『自称』移民団】にな」

それは不気味なぐらいに冷静な声音だった。

「現在、二人そろって重症で、生き長らえても不具は確実、四人から先は覚えていないとさ——厄介なのはこれが一例に過ぎんということだ。わかるな、これは【『自称』移民団】に占領されている今のファリアスにとって、質的にも量的にも一例にすぎん。戦力差があるから、今のところ情勢は沈黙しているが、帝国人への敵意は暴発寸前だよ」

そこでポウデイツカは思いついたように微笑んできた。辺境の英はなぶきの初めて見せる優しい顔だった。

「同じ帝国人だからといって、あたしにはあんたへ含むところはない。ファリアスの現状とて、被占領地にはよくある話だよ。【『自称』移民団】にしたところで五万人もいれば、ゴロツキが混じるのは必然さ。あたしが【『自称』移民団】の指揮を執っていたとしても、似たようなものだろう」

ただ、実際に踏み躪られた者が同じ判断を下すことは期待すべきでない——言わなくてもわかる事を言わないというのは彼女の美点だった。

\*\*\*

彼らの共存を図る——それが可能だったとして——そのためには今ティルナノグにあるすべての資源を効率的に分配する必要がある。

そんなポウデイツカの主張により、女王の前に『有力な配下』達が一斉に集っていた。

際どい立場のアルイクシルは正直に現状を伝えた。

「最善はやはり一…外交。次は二…撤退、三…焦土、四…遊撃と続きますが、いずれの場合も周辺部族との連携を第一に考えるべきです。あ、一応、五…会戦というのもあります。これは玉碎とほぼ同義でしょう」

女王アンドラステは……無言だった。

——だろうな。

アルイクシルは予想通りの反応に落胆しなかった。この数ヶ月でわかっていたが、このアンドラステの政治姿勢は果敢とは程遠い。良くも悪くも和を重んじ、共同体の利害調整を第一に考える。王とはいっても、実態は部族連合の盟主に過ぎず、この場にいる『有力な配下』の意向を無視しては、何も決める事が出来ないのだ。

——当然だな。必要もないのに中央集権なんていう息苦しい制度は生まれえない。各々の生まれで、各々のやり方で、各々の好きに生きていくことができれば、それでいいんだ。

しかし、必要があれば、話は別だ。例えば、外界から強大な異人がやってきた場合、つまりは今のような事態である。

ある意味、それを最も危惧していたポウデイツカは、だからこそ、アンドラステとは対照的に果敢で、中央集権的な社会を望み、逆にアンドラステはそんな『和を乱す』ポウデ

イツカに対してのみ峻厳だったのだろう。

だから、事ここに至ってボウディツカに視線が集まるのも自然なことかもしれない。  
ところがそのボウディツカはとんでもない事を言いだした。

「あー、あたしとしては、この【対アツザフル帝国連合】構想については『アル・アイリム・ムラト・アヤド白衣の賢者』を旗頭と考えているんですが……皆さんどうです？」

当然、一堂は唾然として、即座に紛糾した。当然だろう。そもそもアル・イクシル本人が驚いている。

「馬鹿な。何を言っておられるのです！」 「文弱の徒に戦の何がわかると！」 「しかも、そやつは余所者ですぞ！」 「それ以前に、その男は帝国の密偵なのでは？」

前二者はそれなりに正当な意見だったが、後二者はアル・イクシルに辛いものだった。この数カ月、職務だったとはいえ、ティル・ナ・ノグ発展のために尽くしてきた。しかし今やその立場はまさに『侵略者の手先』だった。

特に辛いのはその扱いが妥当だということだ。身に覚えがなくとも、逆の立場なら自分も疑う一人だったであろう。そこで

「ボウディツカ」

とアンドラステが初めて口火を切ったので、さすがに静寂が訪れた。

「あなたが最初に彼へ決闘を挑んだのは……演技ですか？」

「おや、お解りでしたか？ 女王陛下」

「あれはこの男を試していたわけですね。密偵が本業ならば、あの場であなたとの決闘を了解するはずがない。少なくとも当人にはティル・ナ・ノグのために力を尽くす気があったからこそ、危険を冒してでも信を得るため、決闘を受け入れたのだと？」

「はい。また、こいつに地図を渡したのにはそういう意味もありました」

「彼はそういった軍事機密を手に入れたにも関わらず、それを帝国軍に流さなかったと？」

「上陸した帝国軍の行動にも地理に不案内な者特有の失敗が見受けられます。地図を手に入れた形跡がありません」

アル・イクシルはこの会話の流れにあっけにとられてしまった。

——野蛮人の女二人で、急に息びつたりになりやがって……いや、そもそも、最初から僕は騙されていたのか？

こうなると最初の不和も全て演技ではと疑いたくなくなる。

しかし、アル・イクシルをさらに驚かせたのは、女王の次の一言だった。

「では、打・合・わ・せ・通・り、その路線で行きましょう。ボウディツカ、皆にその説明を」  
「はっ」

とボウディツカは急に忠臣めいた返答をしゃがった。そして滔々と説き始める。

「第一に、賢者様は地元出身でない故にしがらみがない」

これについては「それはそうですがねえ……」というのがその場の共通した雰囲気であり、アルⅡイクシルも同意見だった。

前述した通り、アンドラステはこのテイルⅡナⅡノグ全域の支配者ではない。確かに、この状態でアンドラステが旗頭になった場合、他の部族は『これでは、なし崩し的にアンドラステをテイルⅡナⅡノグ全域の支配者と認める事にならないか?』という反発を招きかねない。逆にこれが余所者のアルⅡイクシルが旗頭ならば、『地縁血縁のない余所者が支配者になれるわけがない。安心だ。またアンドラステが旗頭の場合と違って、自分の部族だけを優遇するという事は(そんなものないので)ありえない。公平だ』と幾分反発が和らぐだろう。

歴史的にも似たような事例は少なくない。一理ある意見と言えば、一理ある意見だ——が、それにしたところで、一理に過ぎない。

「第二に、ウルルの探究士様だけあって、先の台詞の通り、戦術戦略にも長けておられる」何を馬鹿なことを——とアルⅡイクシルは喉まで出かかって、これは何とかこらえた。

周囲は意外とボウディッカの言葉に感心していたからだ。

——あの程度、軍記物を読んだだけの子供にも言えるだろ！

が、例によって、アルⅡイクシルには過大評価の視線が集まっていた。

……最近わかってきたのだが、彼らのアルⅡイクシルへの認識は単なる探求士ウラマーに対するものではなく、どこか宗教めいた部分がある。外界からの来訪者を神とみなす稀人信仰マレピトというやつだ。実際、先進国からの稀人マレピトを拜んで、知識を習い、交易を行えば、莫大な利益があるので、合理的でもある。原始社会に多いこの信仰が自分にも向けられている事にアルⅡイクシルも気付いてはいたが、これまで放置しておいた。そう思わせておいた方がテイルⅡナⅡノグの近代化を進める上で、便利だったからである。

だが、事ここに至ると後悔の種になる。

彼らにとって《神／稀人マレピト》とは、ただ強大な力を持つだけで、善でも悪でもない。それ故、神を以って神を制すという発想も十分ありえるのだ。つまり、ファリアスにやってきた邪神Ⅱ帝国軍を追い払うのに、アルⅡイクシルという別の来訪者を守護神に仕立て上げるという構図もある。

無論、その構図をそのまま信仰できる程、彼らも純朴ではない。だが、非純朴の筆頭ともいえるボウディッカに『ちよいと化した小細工』を披露されると

「それは妙案！」「うむ、その男に指揮を任せるか否かは別ですが……」「その策は是非実行すべきでしょうな」

と一気に流れは傾いた。

——おいおい。勘弁してくれよ。

そもそも、彼らにも自信がないという強大な動機がある。この空前絶後の苦難の時期に

旗頭を押しつけられても、危険ばかりが大きいのだ。

「……これが『禅譲』というものか？」

上古の王権は、親から子に伝えられる世襲でもなく、力あるものが乗っ取る篡奪でもなく、有徳の者へと『禅譲ゆずり』の形が多かったという。小さな村の村長とか、小学校の委員長とかと同じで、権力自体にさほど旨味がないので、欲しがるものではなく押し付けたいものであったからだ。

その貧乏籤びんぼうくじを彼らはアルⅡイクシルに引かせたいのかもしれない。

実際、ボウディツカの最後の一言が決定的だった。

「第三に——まあ、これが最大の理由だが——負けた時も、こいつの首を差し出せば済むだろう？」

つまりは生贄だ。アルⅡイクシルを前に出し、戦えるだけ戦って、武威を示し、少しでも良い条件で講和に持ち込む。その際、降伏に近い惨状になり、ティルⅡナⅡノグ側の有力者の斬首が講和条件になっても、死ぬのがアルⅡイクシルなら問題ないという計画だ。理解の早い者から「おお、なるほど」「さすがはボウディツカさま」と称賛し始めた。

「……僕が断るといったら？」

「今すぐ生贄の羊になるだけさ」

見えない刃が突き付けられた気がした。

反射的に視線を動かすが、チーシュイは……苦々しい顔のまま動けなかった。

ティルⅡナⅡノグに到着した直後こそ、決して離れる事なかった護衛者チーシュイであるが、現地住民と良好な関係が続いていたため、つい油断があったらしい。二人の間隙には例の女官達が割り込んでおり、チーシュイが動けないという事は、彼女たち自身だ。そも手練れであるという事なのだろう。

今まで一貫してアルⅡイクシルの味方であったアンドラステも表情を変えなかった。

——信頼していた僕が甘かった。

歯がゆいままにアルⅡイクシルは言うておく。

「帝国に対する人質として役割は無理だぞ。僕にそんな価値はない」

「知っているよ。白衣の賢者だからな。だから、血祭りにして、我らの戦女神に捧げるまでさ。頼りにならない奴だが、士気は上がるだろう」

「貴様……」とチーシュイが一步だけ、足を進める。「結局、我が君を害する気か」

「あたしは執念深いんだよ」ボウディツカはアルⅡイクシルの耳元で小さく囁いた。「と同時に、あんたを義士と見込んでの話だ。頼む。この島を見捨てないでくれ」

「……」

きつと演技なのだろう。その時、ボウディツカは震えていた。

そして、翻ってはアンドラステに向かい明朗にこう言い放った。

「よろしいですね、母上も」

——ちよつと待て、じゃあ、こいつ王女なのか？

アルⅡイクシルが連続する衝撃に対応しきれぬまま、事態は推移していく。

「では賢者様のお言葉に従いましょう」アンドラステは白々しくも力強く断言した。「帝國との外交、周辺部族との連携を並列して行います」

「じゃあ、周辺部族との連携については、あたしがプラスに指示しておきますよ。実はこんな時のためのツテも幾つかあります」

「待って下さい」とアルⅡイクシルは口を挟む。「何故、あなたが？」

「しょーがねえだろ。こんな未開の地じゃ、あたしみたいに読み書きできるのは貴重なんだ。それにあたしも一応、王家の血統だし。あんたがここで重宝されているように、あたしにも雑務は回ってくるさ。それとも、あたしが遊んでいるとでも思っていたのか？」

「…：狩りや喧嘩やプラスさん苛め以外にも、色々やっていたのですね」

「ま、少し先走ったのは悪かったかもな。だが、ある程度まとまった形にしてからじゃないと、報告されても困るだろ。皆も暇じゃないんだし」

アルⅡイクシルは疑念を覚えながらも、それ以上の追求は避けた。最早、自棄である。「では先程の続きです」と破れかぶれで言葉を続けた。

「一…外交や二…撤退などでは人的資源は温存されますが、物資や農地などの非人的資源は消耗します。五に近づくほど人的資源は消耗されますが、非人的資源は温存されます。では、一から五までの具体案とその長所短所をこれから説明しましょう」

一つ一つ説明した後、アルⅡイクシルは勿論『一…外交』に近い選択を進めた。ところが議論は『四…遊撃』から『五…会戦』に近い選択になっていた。どこに本陣を構えようかの、誰を先鋒にしようかの、いつの間にか戦う事が前提になっている。

「正気ですか！ 帝国軍とまともに戦って勝算があるかと？」

気が付いたら、アルⅡイクシルは本気で憂い叫んでいた。

その一声に一同は静まる。が、物分かりの悪い一人が食い下がってきた。

「しかし、テイルⅡナⅡノグの武勇をすれば…：」

「僕のチーシュイ一人に及ばぬ武勇で何ができるのです？」

アルⅡイクシルは冷厳な事実を口にした。彼らの誇りを傷付けるのも覚悟の上だ。

実際、この島に渡ってからの数カ月、チーシュイは引つ切り無しにテイルⅡナⅡノグの腕自慢から、決闘を挑まれていた。

そして、チーシュイはその悉くに打ち勝ってきた。

アルⅡイクシルがこの島で柄にもない辣腕を振るえたのにはそういう背景もある。繰り

言になるが、ティルⅡナⅡノグでは尚武の気風が強い。秀でた武人であるチーシュイはそれだけで尊敬される。そして、その尊敬されるチーシュイの主人たるアルⅡイクシルもまた一目置かれていたというわけだ。

だが、そんなチーシュイも帝国では『敗戦奴隷』に過ぎない。組織として強さの前には個人の強さなど無意味なのだ。

その事を仄めかすと反対者の一人は

「賢者さまは土と共に生きている民の気持ちがあわかってはいない」

と吐き捨てるように言った。

——何が気持ちだ。馬鹿なことを……!

アルⅡイクシルは思わず唇を噛んだ。

——精神論で戦術が動くことはある。だが、戦略は動かない。

と言ってやろうとした寸前に白衣の裾をチーシュイに引っ張られた。

こういう場でチーシュイが口を挟むのは珍しい。思わず、アルⅡイクシルは耳を傾けた。

「これは精神論ではない」小声で、しかしはっきりとチーシュイは諭した。「農地を手放しては離反者が出るという意味だ。餓死するよりは戦死の危険を選ぶ者も少なくない。餓死の回避が絶対に不可能だが、戦死の回避が絶対に不可能ではないという場合は特にな

……皆がお前のように三食腹いっぱい食べてきたわけではない。戦がなければ人が死なないわけではないんだ」

「初めて意見が合ったな。あんた貧農出身か？」ボウディツカは皮肉気に笑った。「ま、こいつの出身はともかく、事実が事実だ。というか、賢者様、自分が毎日食っている飯を誰がどうやって作っているのか少しは考えてくれよ。干拓事業にも関わらせただから、わかるだろう？ 百姓連中はあんたに飯を運んでくるだけの人形じゃないんだぞ」

これにはアルⅡイクシルも俯かざるをえなかった。

都市居住者の驕りだ。あと少しでこの【連合】は合理的な離反者を出し、何をする事もなく瓦解していただろう。

——とはいっても、帝国軍五万とまともに戦って勝てるのか？

そこでふとアルⅡイクシルは気がついた。

自分はいつの間にか真剣にティルⅡナⅡノグの将来を考えている。

いや、自分だけではない。あの『物分かりの悪い一人』にしても、外交撤退を奨めるアルⅡイクシルに対し、『お前は帝国人だから、帝国に対して、そんなに弱腰なんだ！』とは言わなかった。彼は彼で冷静に戦力を計算して——しようとはしているのだ。それだけでも、アルⅡイクシルは随分やりやすい。

いや、やりやすいも何も、自分は押し付けられているのだ。これでやりにくかったら、それこそ投げ出すしかなくなる。だが、逆に彼らが彼らなりに考えてくれているのなら、

やれるだけはやってみたくなる。

——騙されているな、僕は……。

その自覚もあった。

しかし、慣れというのは恐ろしい。この数カ月、探求士<sup>ウラマー</sup>として、彼らを導いてきたアル  
Ⅱイクシルは、この場においても同じ事をやろうとしている。チーシューイにしても、裾を  
引っ張れる距離にまでアルⅡイクシルに近づいておきながら、やった事と言えば、ティル  
ⅡナⅡノグのための助言である。彼も彼なりにこの島への愛着があるのかもしれない。  
改めて、アルⅡイクシルはこの島を見渡してみる。

だが、目に入ってきたのは島ではなく人であった。

先進国ではまずみられない共同体への素朴な一体感、それに基づく真摯な危機感の姿だ。

——「賢者さまは土と共に生きている民の気持ちがわかってはいない」

彼は正しかった。あの箴言を今ようやく理解した。

アルⅡイクシルはいい。帝国に帰れば、とりあえずの衣食住はある。

ボウディツカやプラスなどもまじらう。アツザフル語を話せるし、何より若く健康で  
才能もある。帝国に亡命してやっていく事もできるはずだ。

しかし、そうでない人間も大勢いる。いや、むしろ、そちらの方が多数なのだ。

そして、そんな弱き者の群れを守るために彼らは戦いたいと言っているのだ。

故にこそ、彼らは異邦人アルⅡイクシルに未来を託そうとしていた。

だから、次の言葉を紡がざるをえなかった。

「……では、僕が帝国軍に向かいます。女王陛下、このアルⅡイクシル・ディアウス  
に彼らとの交渉全権を委ねていただきます。……ボウディツカ姫の発案を併用しますから、  
形式的なものになるとは思いますがね」

「よしなに」

女王はしてやったりと邪な笑みを浮かべた。

\*\*\*

ボウディツカが今回に限って普通の貫頭衣を着込んでいた。

驚いたアルⅡイクシルが遠回しにその理由を尋ねると

「今回はプラス抜きだからな」

とよくわからないことを言った。

「……前々から思っていたのですが、何であんな格好をしていらつしやるのです？」

「決まっているだろ」ボウディツカは心底愉しそうに答えた。「プラスがアタフタするの  
が、面白れえからだよ」

「……それは彼が目のやり場に困っているのでは？」

「それが面白いんじゃないか」

「……ま、今回は姫殿下に目立たずにいてもらねば、困りますけどね」

アルルクシルとボウディツカは二人で歩いている。

目的地は上陸した帝国軍宿営地。

そこへ二人だけで向かっている。アルルクシルの傍にチーシュイはいないし、ボウディツカの傍にもプラスはいない。それだけで随分違った雰囲気になる。チーシュイとプラスが揃って、この構成に大反対したのも無理なからんというべきか。

しかし、例の『ちよいとした小細工』をやる上でこれは必須の組み合わせであった。

つまり、アルルクシルとしては、出張先にいきなり現れた母国の【移民団】に挨拶に行き、彼らの事情を聞く必要がある。アルルクシルのそもそもの職務を果たす上でも、彼らの存在は大きな要素（というか邪魔）になるからだ。

また、ティルナノグの女王アンドラステとしては、そんなアルルクシルに『ついでに我々先住民族の事情説明と、外交交渉も任せます』と要請してもおかしくはない。双方の言語、文化、状況に精通した外交官としては適切だからだ。

ただ一点、

——アツザフル人のアルルクシルがティルナノグの利益代表者となりえるか？  
という問題を除いては。

ティルナノグ人としては、アルルクシルを信じ切ってしまうというのも一つの手段であった。繰り返すが、ティルナノグ側の外交官になるというのは、アルルクシルの職務でもある。仮にボウディツカの提案がなくとも、やはりアルルクシルは外交的な役目をする事になったであろう。また、これまで共に汗水流してきた現地住民の権利は、人情として尊重したい。また、それが母国アツザフルの利益と一致するかもしれない。こういう時、現地住民のために最後まで尽力した派遣官僚というのは、実のところ、珍しくないのだ。

ただし、そうでないこともある。

外交権を与えられているのをいいことに、ティルナノグ人の権利を売り渡すような条約を結んだり、あるいはそのままとんずらしたり。

だから、ボウディツカは『ちよいとした小細工』を提案した。具体的には、アルルクシルを外交官にする代わりに、二つの保険をかけるというものだ。

一つはアルルクシルが帝国軍のところへ行く間、奴隷（という名目の友人である事が明白な）チーシュイを人質とし、アンドラステの手元に置いておく。これは確実とは言い難いものの、一定の効力はある。

二つ目はそのチーシュイの代わりにボウディツカをアルルクシルの付き人とし、監視

させるといふものだ。アル・イクシルがテイル・ナ・ノグを裏切るような真似をすれば、その瞬間にボウディッカがアル・イクシルをぶった斬るという寸法だ。

「さ、あたしと二人きりの旅を愉しもうぜ。賢者様」

「……そういう物言いはやめてくれませんか？」

なんとなくチーシュイとプラスが揃って五月蠅い事になりそうだった。

「あんだだって、陛下……母上から何か言われているんだろ？」

「ええ。『この機会に二人で腹を割って話し合っておくべきでしょう』との事です」

「けっ、嫌な女」

毒づくボウディッカであったが、その頬には赤みがさしていた。アル・イクシル、ボウディッカの連携が今後の要であるという母親の配慮が癪ならしい。

「……あの時は黙っていましたが、僕にこんな戦闘指揮の経験は皆無ですよ」

「そりゃあ、向こうさんも同じさ」

ボウディッカは説く。

今回の帝国軍首脳部にはいわゆる『革命戦争経験世代』がいない。つまり、新進気鋭の若手に経験を積ませようという魂胆らしい。

アル・イクシルは納得しつつも問い質さずにはいらなかった。

「……どうして、そんな事をご存知なんです？ アツザフル人の僕だって、そんな細かなところまでは知りませんよ」

「そりゃ、蛇の道は蛇さ。世間話から引き出せる情報は零ではないし、小銭で味方を売る奴はどこにでもいる。無論、手が出せない部分も多いが、將軍の経歴ぐらいは調べれるさ。

こっちの情報も重要機密以外は漏れていると考えておけ」

「……それも陛下に内密でやっていることですか？」

「何が言いたい？」

「いえ、あまり独断専行が過ぎると……」

「まさか、あの女への反逆を企んでいるとでも？ おいおい、いくらあたしが未開の地のお姫様だからって、今の王様をぶっ殺せば、次の王様に成れるほど、簡単じゃないよ」

あれはあれで声望もある——とボウディッカは忌々しげに、そして、どこか誇らしげに語った。

「それに王家の血だけなら、プラスだって引いているんだぜ」

「プラス君が？」

「むしろ、血脈だけなら、あちらの方が高貴な身分だ。まあ、小さい頃から、散々苛め倒しておいたから、今じゃ、あたしに黽られるのが大好きな変態野郎になっているけどな。ま、身の程知らずにもあたしに惚れているみたいだし。あたしの言う事は何でも聞くから、結婚して『共同統治』っていうのもいいかもな」

ケラケラ笑う彼女の目には薄い脅しの色があつた。

「……殿下があと十年早く生まれていれば、僕の出番はなかったでしょうね」

「出来れば、あと二十年早く生まれ、帝国へ侵攻し、中原で皇帝となりたかつたよ」

「……頼みがあります」

「なんだ？」

「……政権交代は戦争の後で」

「わかっているよ。王になっても、治める国がなけりや、意味がねえさ」

アルⅡイクシルとしては際どい発言だったのが、ボウディツカはさらりと流した。

「さて、雑談はここらあたりにして、今、わかっている範囲で連中の軍制を伝えておくぞ。大した情報じゃねえが、ないよりましだろう」

「ええ、特にあなたが苦勞して集めてくれた事を考えれば」

そう言うトボウディツカはまた頬を染めた。そこには十六歳という年齢らしい微笑ましさがある。しかし、次の一言でその微笑ましさも吹き飛んだ。

「まず、司令官はアーシルⅡウマイヤっていう妙な名前の女で……」

「アーシルⅡウマイヤっ？」

その名を聞いた途端、アルⅡイクシルは思わず声を上げてしまった。

「……知っているのか？」

「い、いえ、初めて聞いた名前です」

\*\*\*

こういう時、ウルルの神御衣カムミンは役に立つ。最低階位とはいえ、身分証明としては十分で、あつさり帝国軍の宿营地へ入れてもらえた。荷物持ちの現地奴隷という事でボウディツカの随伴も認められる。

意外だったのが、その先だ。

なんと数時間待たされただけで、即日、噂のアーシルⅡウマイヤに会えるというのだ。最高責任者である彼女はそれ相応に多忙なはずで、一介の白衣がこんなに早く面会できるとは思わなかった。正直、数日待たされる位は覚悟していたのである。

——あるいはこれも外交技術の一環かな？

勘繰ってはみたものの、経験のないアルⅡイクシルにはよくわからなかった。こちらが女王アンドラステの全権大使である事を向こうが考慮しているのは間違いないが……。

アルⅡイクシルとしてはここに左遷される時の面談と大差ない気分である。

「私がアーシルⅡウマイヤです」

その名乗ったのは亜大陸ヒンド系の娘であつた。腰まで届く長い三つ編みを左右に伸ばしてい

る。だが、初対面のアルルクシルの目を引いたのは、奇妙な首飾りであった。質素な長衣ベプロスの下で、砂色の柔肌の上で、首飾りがやけに黒光りしている。そして何より……、  
——や・は・り・若・い・な。

顔つきは落ち着いているが、顔立ちはむしろ幼い少女である。それだけに実年齢はわかりにくい。ひよっとしたら、ボウディツカと大差ないのかもしれない。五万もの将兵を統轄する事を考えれば、異例の大抜擢であり、それだけの実力者なのだろう。

そんなアルルクシルウマイヤは開口一番に尋ねてきた。

「あなたが《白衣アルリアム・ムライト・アブヤドの賢者》——アルルクシルですか？」

厭味つたらしい程に綺麗な正則語フスハイだった。旧貴族階級の出かもしれない。

アルルクシルが無言で首肯する。アルルクシルウマイヤは「なるほど」と納得した後、「では、アルルクシルさん、お願いしますね」

と一言述べた後、自らは瞑目した。

代わりに前に出た男は、それこそ《緑》の神御衣を纏った探求士ウラマーであった。どうも、このアルルクシルウマイヤの副官的存在らしい。アルルクシルがウルルの命令でテイルルナノグに派遣されたように、彼もアツザフル軍に派遣されているのだろう。ウルルは優秀な参謀の供給源でもあるので、こういう事も珍しくない。

（無論、この《緑》とは彼のウルルにおける階位であって、彼にも個人名があるのだが、人の名前を覚えるのが得意でないアルルクシルはこれで認識していた。当然、前述の

《緑》とは別人である）

アルルクシルは自然と恐縮してしまう。繰り言になるが、第五階梯《緑》は雲の上の存在だからだ。もっとも最低階位《白》よりも下など存在しないのだが……。

いずれにせよ、《緑》は簡潔明瞭に言う。

「君の任務は終わった」

「いえ、僕はその話を聞いていませんが？」

アルルクシルは反射的に出た己の一言に驚いた。

これは《緑》も同じらしく、眉を顰めた。

——まずい。これはよくない傾向だ。

アルルクシルは焦った。帝都にいた頃のアルルクシルにはもつと序列に気を使っていた。相手が《緑》ともなれば、まずは恐縮するという下っ端根性を持つてはいたのだ。

——ここに来てから、なんだかんだで『賢者様』『賢者様』と重宝されてきたからなあ。末端の人間が持つべきでない主体性や反骨心というものが身に付いてしまった。階位が上であろうとも言うべき事は言う。そんな子供の正論のままに口答えをしている。

「聞いていないのなら、今、伝える。君の任務は既に完了している。帰りの船も用意してあるし、報酬も追って沙汰する。とりあえず第二階梯への昇進推薦状も付けよう。以上だ」

「……その推薦状の名義人は？」

「私では不足かね？」

「とんでもありません。第五階梯の署名とは心強い。これで僕もようやく憧れのアルリアハマル《赤》を纏えます」

「そうかね」

まんざらでもなさそうなアルリアクフタル《緑》に対し、隣のボウデイツカが少し顔をしかめた。

だが、次のアルリアクシルの一言で、双方の気配がまた変わる。

「では、その推薦状をお渡しください」

「……ここかね？」

「はい。僕ももう三十です。確約が欲しいのです」

「……そうか、今、認めよう」

哀憫とも侮蔑とも取れる態度でアルリアクフタル《緑》は頷き、紙に筆を走らせた。

しばらくして、人柄を思わせる厳格な文字の昇進推薦状が完成する。

「これでどうだね？」

アルリアクシルは震えながら、書状を受け取り、心底感動した。

「ああ、二十年近くも頑張ってきた甲斐があった……！」

「正式な認定ではない。そも第二階梯で満足してどうする。まだまだ上はあるのだよ」

「はい。ありがとうございます」

思わぬ激励にアルリアクシルは自然と頭を下げていた。同時にこのアルリアクフタル《緑》は善人だなと確信した。だから、何気ない口調で尋ねる。

「あ、皇帝陛下からの現地退去命令書は？ あるいはウルルから委託業務解除書は？」

彼はそこで顔色を変えた。

逆にアルリアクシルは光明を見た。それらの書式を用意できないということは、帝国中枢やウルルと彼らが連動していないということだ。

——これは帝国の総意ではないな。

あくまでも一地方軍閥の独断専行ということなのだろう。

考えてみれば、ありそうな話だった。帝国は広大で国境は長大だ。国力も強大だが、隣接する国家も多く、彼らとは表面上の友好や平穏を保っているものの、潜在的にはそのすべてが敵とっていい。そこに裂かねばならぬ戦力は甚大で、たかだかテイルナノーグ如きに全力を出せるはずがない。これだけの兵力を動かしている以上、帝国中枢が気付いていないわけがないが、彼らのために書式一つ用意しないということは、積極的に応援しているわけでもないのだ。

もし、ここにいる連中がテイルナノーグの占領に成功すれば、帝国中枢はそれを認め、失敗すれば『あれは地方軍閥が勝手にやったことだから』と切り捨てるつもりだ。

つまり、援軍はない。

次から次へと大陸からやってくる帝国兵を倒し続けなくともよい。

本土との外交を上手く行えば、目の前にいる敵を倒すだけでいい。

後から考えれば、ここで顔色を変えた事はアルリアクフダ《緑》の失態であった。

——下手をすれば、それこそ百万のテイルノグ人を敵に回す事になるかもしれない。無論、その百万は職業軍人ではない。各個撃破していけば、最終的には帝国軍が勝つ。だが、それでは被害が大きすぎる。兵員の補充が期待できない以上、何としてもそれは避けたい。

そんな事情をアルイクシルに悟らせてしまったのだ。

「……正式な書面は帝都で渡されるだろう」

「帝都で？」アルイクシルはわざとらしく首を傾げた。「仰る意味がわかりません。僕の任期はまだ残っていますよ。仮に中断であったとしても、書面を受け取ってから、現場を離れるのが規定です。そうでなくては末端が勝手に行動する事を認めてしまう」

「わからずともいい。君はもう帝都に帰りたいまえ」

「何故です？」

「命令だからだ」

「誰の？」

「帝国の、だ」

「ですからー、こーいうのは正式に書面で回してもらわないと困るんですよ。口頭では言った言わないの問題が出てきますからねえ。あなたも大人なら、お分かりでしょう？」

わざと『融通の利かないお役人』風に言ってみるとアルリアクフダ《緑》は顔を顰める。

「貴様……私を馬鹿にしているかかね？」

「……根拠もなく、己を卑しむのはよい趣味とは言えませんね」

アルイクシルは少し驚いた。彼のような『高学歴』の人間でもこんな事を言うのだ。横目で見るとポウディツカは必死に笑いを抑えている。と、同時に彼女にはこの応答をよく見ていて欲しいと思う。法治主義、形式主義、官僚主義とはこういう風に使うのだ。上の者の権限を制約する事で、下の者の権利を確保するのが目的なのだ。いずれ、テイルノグにも必要になるだろう。

「これは第五階梯の命令だぞ」

「命令も何もあなたにそんな権限はないでしょう。たとえあなたが最高階位のアルリアズワト《黒》であったとしても、僕には従わない義務がある」

ましてや、たかが第五階梯のアルリアクフダ《緑》ごときでは——と言外に告げる。

「ウルルは皇帝直属スルクの學術機関、その探求士ウラマは例外なく皇帝の直臣です。この意味をお忘れですか？」

押し黙った《緑》の探求士に対し、玲瓏たる声が助け船を出した。

「話が奇天烈な方向に向かっています」

これまで黙っていたアーシルウマイヤがそこで口を開いたのだ。

「《緑》さん。実直なのはあなたの美点ですが、こういう輩には付け込まれますよ」

「……どういう意味です？」

「懇願すべきはあなたではなく、その白衣の賢者だということです。何故、あなたが懇願する立場になっているのです？」

「上意下達は組織の基本です」とアルイクシルは気が付いたら《緑》を弁護していた。

「故に《緑》殿が僕に指示を出そうとしたのは間違いではありません」

「互いの上下関係が成立している限りにおいてはそうです。が、この場合、それが成立していないのです」

「僕は第一階梯、それだけで第五階梯の《緑》殿よりも下である事は明白です」

「ええ。第五階梯は第一階梯よりも有能と認められたが故に第五階梯であり、第一階梯の上位として振る舞う権能を得ています。……しかし、愚者は常に他人を見下すものですよ。客観的な実力も、社会的な地位も、愚者の前には塵芥に等しい」

アーシルウマイヤは氷の如く冷やかに、しかし炎の如く激しく断言した。

「何故なら、天上天下に唯我独り尊い——そんな風に考えている愚者に他人を馬鹿にしな理由などないからです」

これにはアルイクシルもうろたえた。

「……妄想は程々にされるべきかと」

「妄想……そうですね。妄想と言う事にしておきましょうか」アーシルウマイヤはそこで面白そうにクスリと笑い、論法を変えた。「いずれにせよ『あなたは私にどうして欲しいの?』という類の質問は大概卑劣なものです。質問する側はあたかも相手の懇願を聞き容れる上位者のように振る舞うのですから。……それでいて相手の懇願を受け入れる気など初めからないのです。賭けてもいいですが、その最低階位探求士はあなたが命令を伝える度に、粗探しをするつもりです。人間のやる事ですから、揚げ足の取り様など幾らでもあります。その癖、決して代案を出す事も、行動を起こす事もない。そんな輩に付き合うだけ時間の無駄なのです」

そして、沈黙が続く。

やむをえず、アルイクシルの方から、口を開いた。

「……では、僕が懇願しましょう。上陸目的の説明を」

「無論、移民です」

「テイルナノグ先住民はどうなります？」

「お好きなように。ああ、個人的にはこの島から出ていく事をお勧めしますよ」

「そんなことできるわけが……」

「ならば、我らに駆逐されるまでです」

アーシルがあっさりと言ったものだから、アルⅡイクシルは聞き間違いかと思った。

「こ、このテイルⅡナⅡノグの民に何の罪があるのですか？」

「何もしなかったことが罪。しようもしなかった罪」

少女と呼んでもさしつかえない司令官は淑々と語る。

このアーシルⅡウマイヤに言わせれば、そも、のうのう帝国軍の移民を上陸させた事自体が危機感の欠如を証明している。彼らはその無能と怠惰の罪を購うだけの話だという。

「馬鹿な、何もせずに生きてきたものなど、この世に一人たりともいない」

——水を汲み、畑を耕し、鳥獣を追い、果実を拾って、生きている。

——それができぬ、土地なき者は、機を織り、あるいは文字を書く事で生きている。

——それすらできぬ、冬に生きる者は、身をかがめ、飢えに耐える事で生きているのだ。

この時、アルⅡイクシルの脳裏にあったのは、テイルⅡナⅡノグの民ではなく、そこに見た己の似姿であったのだろう。『三十年の歳月を無為に過ごしてきた』と他者に評価されていたアルⅡイクシルは、自分自身を弁護していたのだ。

「誰もがこの辺境で生き抜くために、皆、頑張ってきたのです……！」

「頑張るとは、漫然と同じ労働を繰り返す事ではありません。あるやり方が駄目なら、次のやり方を試し、そのやり方が上手くいっていても、失敗する場合を鑑み、さらには未知の危険に備え、情報を収集し、考え続ける事です。そういった意味での頑張りができていれば、我々の上陸をこうも容易く許す事はなかったでしょう」

「それは盗人の理屈でしょう」

「この島はテイルⅡナⅡノグ人の被造物でもなければ、所有物でもないでしょう？ 彼らが勝手に住みついたように、我らもまた勝手に住みつくまでです」

「なら、あなたの家と同じ理屈を持ちこまれても文句はないと？」

「その力があるのなら、それを成すべきです。ねだり、甘え、駄々をこねるよりは、自ら手で勝ち取ろうとすべきでしょう」

アルⅡイクシルには返す言葉がなかった。話にならないとはまさにこの事だ。

——交渉の余地なし……か。

判断を下すと急に肩の荷が下りた気になった。くつくつという笑いが自然とこぼれる。

「では、ここから先は、個人的な質問になるのだが……」

アルⅡイクシルは口調を変えて尋ねる。

「《**十番目の雌奴隷**》——君は**阿藪……いや《黒衣の魔女》**の弟子か？」

「……いいえ、奴隷ですわ」一瞬だけ《**十番目の雌奴隷**》は目を見開いたものの、すぐに優雅さを取り戻した。「私の知る限り、あの方は未だ弟子を取られたことはありません」

「そうか。しかし、その考え方はやはり『ご主人さま』の影響だな？」

「ええ、あの方の調教を受けたことは私の大いなる誇りですわ」

これには帝国軍の首脳部だけでなく、ボウディツカまで目を丸くした。

今まで、アルⅡイクシルは表向きとはいえ、遜った姿勢を崩していなかった。それがいきなり詰問する側に立ったのだ。それどころか、敵の総大将たるアーシルⅡウマイヤも、それに付き合い肅々と受け答えをしている。

「生母に付けられた諱いみなはありますが、お教えできませんよ。私は慎み深い乙女なので」

「……占領地で強姦された娘たちの貞操も鑑みてもらいたいものだな」

「あらあら、無能って辛いですわね」

「……彼女たちも『何もしなかったことが罪。しようともしなかった罪』なのか？」

「当然です。無能無力といった劣った者は苦しむべきです。その苦しみの中から立ち上がってこそ、人は高みを目指そうとするのです。弱者である事が罪悪ではなく正義と見做す風潮が蔓延れば、誰もが努力する事を放棄し、怠惰と退廃が社会を覆い、人類は墮落への一途を辿る事になってしまいます」

そう言って、淑やかに微笑むアーシルⅡウマイヤに、齒を食いしばったのはボウディツカだけではなかった。アルⅡイクシル辺りには蛮族の娘に同情するだけの品性を持っているらしい。アルⅡイクシルを嫌悪した者も、事この点のみにおいては共感を覚えているようだ。

——だが、そこまでなんだよな。

結局、彼もそれを止めようとはしなかった。いや、軍規のために抑制しようとしたのかもかもしれない。しかし、そこまでだ。

程度の差こそあれ、やはりアツザフル帝国はアーシルⅡウマイヤが語った理念で動いているのだろう。それが中原を制し、進歩を重ね、常に勝ち続けてきた国、敗北を経験した事のない者たちなのだ。

——やはり、彼らは一度負けた方がいい。そこから学んでもらおう。

アルⅡイクシルは薄暗い決意を固める。

彼女の倫理からすれば、この決意は墮落と呼べるのだろう。弱者の恨みを以って強者の足を引っ張ろうというのだから。強者を引き摺り下ろし、弱者の踏み台とするのだから。

「しかし、お気づきでしたか。アルⅡイクシル・ディアウス・イブン・ラフ・マーン」

アーシルⅡウマイヤはわざわざイブン・ラフ・マーンの息子イブン・ラフ・マーンというアルⅡイクシルナサフの父称ナサフを強調した。身元は割れているという意趣なのだろう。

「……その父称ナサフは既に捨てている」

「では『マジヌーン』とお呼びしましょうか？」

「……………」

「失礼、これは蔑称でしたね」アーシルはくすくすと品よく笑った。「ですが、本当に驚

きました。私の出自は機密に分類されていたはずですから」

「≪十番目の雌奴隷≫なんていう狂った名がそうそうあったまるか」アルルクシルは声音が昂るのを抑えられなかった。「さらに言えば、貴様の首元にこれ見よがしに光っているのは、装飾用の首飾りではなく、家畜用の首輪だ。そういうものを悦んで着けている連中を他に知らない。もともと、僕が知っているのは四番目であるシャーロット……いや、レオノラまでだが……随分と『繁殖』したらしいな」

「ああ、ラービウ姉さまですね」アルルクシルは懐かしそうだった。「でしたら、私も存じ上げていますよ。ええ、色々と仲良くさせていただきましたし」

「……あのレオノラが≪四番目の雌奴隷≫で貴様が≪十番目≫。人間を数字で呼ぶ——あの魔女のやりそうなことだ」

「名は呪いですよ。あの方は不要な縛鎖で私たちを縛ることを望まなかったのです」

「自ら奴隷を名乗り、首輪を身に付けている娘がか？」

「それが敬愛というものです。あの方からの言葉一つ眼差し一つが私にとっては大いなる悦びです。現存する十二の奴隷首輪の一つを与えられた夜などは……ああ、恥ずかしくて口に出来ません」

胸元で両手を合わせ、アルルクシルルクシルは恍惚に震えた。そして、急に思いついたように皮肉な笑みを浮かべる。

「それに……≪霊薬≫やら≪雷帝≫やら、大仰な名を付けておきながら、内実が≪白衣の賢者≫ではねえ」

「では刮目すればいい。名が呪いであれども縛りに非ず、宿にして祝と成るところを」

\*\*\*

帝国軍の陣中客室。

アルルクシルが帰り仕度をしていると、盗聴の危険がないと判断したのか、ボウディツカが囁いてきた。

「外交官が喧嘩売ってどーすんだよ？」

「……す、すいません」

考えてみれば、それこそ斬られても仕方がないような事をペラペラと喋っていた。アルルクシルは思い返して背筋が震える。

「ま、その歳で白衣——あんたも溜まっていたってことか」ボウディツカは下卑た事を言う。「いかにも馘首になった人間の自暴自棄って感じで面白かったぜ」

「そうやって、都合のいいように解釈されるのはお止めになって下さいませんか？」

「はっ、嫌がっていた割に、やる気満々だったじゃねえか」

「……何度も言いますが、これも仕事の内ですから」

「仕事？ ウルルの探究士としてののか？ その割にウルルの序列を無視したな」

「たしかに、僕は彼らに無礼な態度を取ったかもしれませんが……」

「彼らではなく、彼女に対してだよ」

「彼女は帝国軍の司令官であって、ウルルの探究士ではありません。繰り言になりますが、ウルルは皇帝直属の学術機関です。極論すれば、そこに所属する僕はアツザフル皇帝とウルルを除く、いかなる権威にも従う理由はないんですよ」

「なるほど……あんた出世できないわけだ」

「……無能なのはわかっていますよ」

「具体的には注意力に欠けるな。あの女もウルルの階位持ちだぜ」

「え……？」

ボウディツカ曰く、あのアーシルウマイヤの二次干渉紋は《純白の外套》を纏ったアルイクシルと似ていたという。勿論、その大きさは桁違いだし、一次干渉紋だけで比べれば、似ているところを探す方が難しい。だから、おそらく一次―二次間増幅が原因だ。首から下に近似点が多いことから、あの長衣ベッロスの下にウルルで作られた神御衣を仕込んでいる可能性が高いという。

——……この娘はこの娘で、化け物じみているな。一次干渉紋と二次干渉紋なんて、普通は区別つかないだろ。

田舎の人間は精霊に敏感なものだし、ボウディツカもいわゆる《巫女》の素養があるのだろう。が、鈍感なアルイクシルからすれば、単にこの娘が人間離れして見えた。

とはいえ、

「ならば、仕込んでみるとみた方がいいでしょうね。何色かまではわかりませんが……」

大方、ウルルの神御衣の上に魔女から貰った衣服を着ていたのだ。狂信的なあの奴隷達にとっではいかなる晴れ着よりも、魔女からの賜りものである粗衣が勝る。だから、着替える度に、その粗衣を上着とし、魔女との思い出に浸るのである。

さすがのボウディツカもそこまでは知らない。故に実務的な解釈のみを行った。

「やはりお前もそう見るか。では、あの女が己の階位を持ちださなかつたのは、いざとという時の切り札とするためか？」

「いえ。単にあの連中が、ウルルの探究士である以前に、魔女の奴隷だということですよ」

魔女に籠絡された少女は、魔女の寵愛だけが悦楽となる。それこそ《一番目の雌奴隷》アウツルウマイヤなどは『姫様』と呼ばれる程の身分でありながら、魔女の傍にいたいという理由だけで奴隷にまで身を落としたのだ。

そこで思いだした。このボウディツカもまた魔女の崇拝者なのだ。

アルイクシルは冗談の一つでも言ってみた。

「彼女に伝を頼んでみては？ 姫殿下ほどの器量ならば、《雌奴隷》の一人になれるかもしれませんよ」

「ならば、その前にそれに相応しい女だと証明せねばならない——その為に、あのスカしたお姉さまをぶちのめすよ」そこでポウディツカは何かを思いついたように尋ねてきた。

「……逆にあんたはどうなんだ？」

「僕が？」

「そうだ。あの《黒衣の魔女》が《白衣の賢者》如きを相手になさるか否かは別として、あの方にお仕えする使徒の末席に加えていただけるとしたら……どうだい？」

「僕が使徒の末席に？ この僕が？」アル||イクシルは絶句した。「馬鹿馬鹿しい。どう足掻いても僕は『十三番目』にはなれません。大体あの《十二雌奴隷》どもと同列だなんて……そこまで己を卑下するつもりはありませんよ」

「言うねえ。最低階位の分際で。あの女の位階が幾つかはわからないが、《外套》でない以上、あんたよりは確実に上なんだぜ？」

「論理的な帰結です。あえて言えば、僕は『0番目』ですから」

するとポウディツカが口を開きかけて、しばらく留まっていた。どうも訊ねるべきか否かが迷っているらしい。彼女にしては珍しい事だが、しかし、ポウディツカはやはりポウディツカであった。聞くべき事はやはり聞く事にしたらしい。

「……気になっていたんだが、アーチェンというのは何者だ？」

「例の彼女は氏名を鵬翦というでしょう？ つまり諱は翦、故に幼名を阿翦です」

「………あんた、鳳雛先生……いや、あの《魔女》と知り合いだっただんな？」

「僕は齡三十。《魔女》とは同い年ですよ。同期でもあったんです。顔は知っています」「それだけか？」

「……幼馴染です。姉弟のように育ちました。今では差が付いちゃいましたけど……」

ついでに、多分初恋の相手だった——とまではアル||イクシルも言えなかった。

代わりに戯言が零れる。

「ポウディツカ殿、以前、僕に『あたしを馬鹿にしているだろう？』と尋ねられました——あの時、僕は質問そのものには答えてはいなかったですね？」

「ああ、考えてみればそうだな」

「答えは『無論、馬鹿にしている』です。天上天下に唯我独り尊い——そんな風に考えている愚者が他人を馬鹿にしない理由などありませんよ」

その時、ポウディツカがどんな顔をしたかは見ていなかった。眼中になかった。敵が魔女の婢——あの阿翦の息がかかっていると事が確定した時点で、冷たい興奮が心身を駆け巡ったのだ。

それは懐かしい感覚だった。アル||イクシルを嘲笑い、見下すばかりの彼女にせめて一

矢報いようと、無我夢中だったあの若き頃の情念である。

そこでアルIIイクシルは気付いた。

——なるほど、僕はいわゆる『ツンデレ』ということか……。

疲れた足取りで例の《アルIIイクシル緑》の男が客室に入ってきたのはそんな時だった。

しかもアルIIイクシルが挨拶をする前に向こうの方から口を開く。

「私は君を評価していない」

彼ははっきりと言った。

「三十過ぎて未だに白衣などどうかしている。よほどの無能、よほどの怠惰なのだろう。

そもそも入学を許したのが間違いだ」

「も、申し訳ありません」

下っ端根性というべきか、アルIIイクシルは反射的に頭を下げていた。

「が、それは私の主観に過ぎん。もっと言えば、偏見だ」

「そ、そうですか？」

「そうだ。私は知らないし、ウルルも知らない。だが、君は知っているはずだ。君がウルルに入るために励んできた日々を。君がウルルに入ってから尽くしてきた日々を。他の誰も知らなくとも、君だけは知っているはずだ——それをこんなところで捨てるのか？」

「そうですね。これ以上、問題を先送りするわけにはいきません。そろそろ決断しますよ。何しろ、僕はもう三十過ぎですからね。遅すぎたぐらいです」

「そうやって、逃げるのか？」

「逃げる？」

「そうだ。ウルルから、アツザフル帝国から、君は逃げ出そうとしている——私はそういう人間を何人も見てきた」

——はいはい、精神論ね。

アルIIイクシルは付き合うだけ無駄かなと思いつつも一応返答する。

「わかりませんかねえ……あなたには能力がない。無能だから当てにできないと言っているんです」

彼は突然顔色を変えた。アルIIイクシルにこんな口を叩かれるとは思っていなかったらしい。白衣が自分を無能だと断ずるなどあり得ないとでも考えていたらしい。

「率直に言えばね、五億デイナーあれば、あなた方は交戦を回避できますよ。昨夜大雑把に計算しただけですが、それだけの金を移住費として投入できれば、原住民を納得の上、立ち退かせることもできるでしょう。でも、五億なんて、用意できないでしょう？——だって無能だから」

言いながら、段々馬鹿馬鹿しい気分になってきた。

彼には慈悲がある。能力もある。だが、それはウルルというシステムの内側での話らし

い。

何を勘違いしているのか知らないが、アルルクシルが自身を下位と定めるシステムを容認していたのは、そのシステムがアルルクシルの権利を保全していたからこそだ。それ以外に理由はない。御恩もないのに奉公する馬鹿はいない。当然の話だ。

が、システムに浸りすぎた彼には、どうもその当然の話が理解できないらしい。システムはあって当たり前、下級探求士は服従して当たり前ということなのだろうか。

彼には慈悲がある。能力もある。

だが、それでも、三文芝居に出てくる『ボンクラ貴族』になってしまいうらしい。

「だから、戦うというのかね？ 馬鹿馬鹿しい。帝国軍に勝てるわけがない。君も三十過ぎだ。夢ばかり見ていられる年齢ではない。出来る事と出来ない事の区別ぐらいつくだろう。それとも自分に社会や世界を変えられるとも思っているのか？」

いや……あるいは、この人は本気で自分を心配してくれているのかもしれない。

だからこそ、大きな溜め息が出た。

「ですから、それは僕が決めることではないんですよ」

アルルクシルは言外に——そして、あなたが決めることでもない——と伝えた。

「僕みたいな駄目人間が一人どうあがこうが、それは広い世界に比べれば塵芥に等しい。僕の行動が有益か有害かは、他人が判断することです。もし、有益ならば、社会がそれを受け入れ、有害ならば、社会が拒むだけの話です」

彼は苦虫を噛んだ顔になった。

さすがに賢い。アルルクシルの言葉の意味を悟ったのだろう。

決めるのは自分ではない。常に他人だ。そして社会であり、世界である。

そこにアルルクシルの意思はほとんど介在しない——同様に彼の意思もほとんど介在しないのだ。階きざはし一つ登れぬアルルクシルと彼との間には圧倒的な力の差がある。だが、世界に対する無力さという点では等しく塵芥だ。

だから、その超越した力を使えばよい。そうすれば、無能なアルルクシルでも有能な彼を打ち破ることが出来る。

この時、アルルクシルは父が説いた『絶対者の意志』インシャアツラーというものを思い出していた。あるいはあの阿翦アチエンが説いた『天意／天命』テイエンも同じかもしれない。己の人生がそういったものに支配されているのだと言われた時、幼い自分は酷く嫌な思いをしたが……

——なるほど、悪くない。

人間は無力だ。とりわけアルルクシルは無能だ。どう足掻こうが、どう抗おうが、出来ることには限りがある。

だが、それは許してもあるのだ。

「……質問に答えてくれ。君は自分が世界を変えられると思っているのか？」彼は何故か

俯き、そして再び希<sup>こいねが</sup>う。「社会がどうこうではない。他人がどう考えるかではない。君自身はどう思っている？ 自分が何かを変えられると……」

「思ってますよ。当たり前じゃないですか」

アルⅡイクシルは即答した。

「僕はこの世界の一部です。社会を構成する部品の一つに過ぎません。外から傍観している神ではない。そんな僕が周囲に影響を与えずに生きられるわけがない」

「それは……」

「逆にお尋ねしますが、あなたはまさか自分が世界を変えずに生きていけると？ 自分の力で現状維持が可能だと？ もしも『僕がこの世界を守るんだー』——などとお考えなら、失礼ですが、それはかなり恥ずかしいですよ。いい加減に卒業<sup>卒業</sup>するべきかと」

\*\*\*

「それでは皆さん、帝国軍を駆逐しましょう」

それがアルⅡイクシルの第一声だった。

軍議に参加していたティルⅡナⅡノグの面々は一斉に首を傾げた。

あれだけ開戦を渋った男が外交交渉から帰ってきたら、いきなり『駆逐』などと口にするのだ。勘繰るのがむしろ自然であろう。アンドラストまで

「それは……『我々の現有戦力で帝国軍に勝つ』ということでしょうか？」

と尋ねてくる。だがアルⅡイクシルは

「ここは【古き女神の教え】に倣います」

とあえて言葉を濁した。

これに真っ先に噛み付いたのはやはりポウディツカである。

「生憎、こちらら野蛮人でね。婉曲な物言いはさっぱりだ。もっと即物的に言いな」

「ああ、これは失礼」アルⅡイクシルはわざとらしく謝る。「帝国の兵站は完璧です。よって、付けこむなら補給です」

それが【古き女神の教え】と何の関係があるのか？——とやはり首を傾げた面々であったが、とりあえず、ポウディツカ辺りにはその戦略案が理解できたらしい。いかんせんアルⅡイクシルの発想は形而上学的であったが、ポウディツカがそれを形而下学的に噛み砕き、並み居る部族長に説いて回った。

瞬く間に議題は細部の詰めに移っていった。

「さて、最後になりますが、最初の質問に答えておきましょう」

「ええ」

「はい。それは無理です。『我々の現有戦力で帝国軍に勝つ』——そんな事は不可能です」

実は冷や冷やの一言だった。が、婉曲に話を進めただけあって、周囲の反応は穏やかだ。そも戦力比からすれば、必然の話なのだ。帝国軍五万に対し、こちらが動かせる兵士は『数万』しかない。……この『数万』という数字自体、帝国出身のアルルクシルからすれば、投げ出したくなる位にあやふやな代物である。が、戸籍が整っていない上に、中央集権とはほど遠い体制で、どれ程の部族か協力してくれるかが怪しい以上、こう表現するしかない。

確実にアルルクシルが——というより、アンドラステが——動かせる直轄部族の成人数と言え、一万である。老人が少なく（何故かはお察し頂きたい）、尚武の気風強く、ほぼ全員に狩猟生活の名残があるため、その一万人がそのまま戦力に転用可能なのはありがたいが、逆に言えば、專業兵士は皆無に近いのだ。

これで訓練を充分に受けている專業兵士五万を相手にしろというのは土台無理なのだ。勿論、周辺部族の協力で、ある程度は数を水増しできるだろうが、正直彼らには中立を守ってくれる以上の事は期待しない方がいいだろう。

「念を押しておきます。我らの現有戦力では帝国には勝てない。それが現実です。まずそれを認めましょう。そこから始めましょう。繰り返になりますが、この条件では勝てないのです。だから、そんな事に挑んではいけない。まともに付き合ってはいけない」

アルルクシルは周りを見渡し、その静寂に満足する。

「故にその現実からの撤退は必須となります。よろしいですね？」

そして、白衣の賢者は拍手を一つ打った。

「——では、現実逃避を始めましょう」

\*\*\*

明け方、真っ先に船を燃やされた。

後で解ったのだが、女王アンドラステの巫術による火が放たれていたらしい。大雑把な言語巫術であっても、潤沢な基礎干渉力と非論理増幅係数、そして、アルルクシルによる気流操作支援があれば、この程度の事は出来るらしい。

いきなり本土との連絡は難しくなった。

だが、この時点ではアルルクシルをはじめ、帝国軍首脳部は焦らなかった。

こういった事態を予め想定し、食料物資は陸に上げていたのだ。そもそも、アルルクシルが看破した通り、元々、本土からの支援はさほど期待できない。むしろ、退路が絶たれた事で将兵の心が纏まった。僥倖と見る者さえいた。

だが、次の夜に火矢で食料が狙われた時は不気味だった。

延焼はすぐに食い止めたが、貴重な食料が失われた事に意気消沈した者もいた。

だが、アーシルは物品の損耗よりも先に死傷者の確認を急がせた。

その総数は零<sup>ゼロ</sup>。帝国軍側も原住民側も人的損失は皆無だったのだ。

この時点で原住民側に狙いがある事が薄々見えてきた。

しかし、怯んではかりもいられない。

周囲に偵察兵を出した。

多数で出かけた者は返ってきたが、少数で出かけた者は返ってこなかった。

その間にも夜になると、度々放火が続いた。例によって、人間ではなく、食料のみが狙われていた。

こうなってくると五万人が密集している事が仇になる。残りの食料が減る一方である事への不安が兵達に広がってくるのだ。

返ってきた偵察兵の報告を基に、近くにあった小麦畑に全軍を移動させる事が決定した。ところが、目的に到着してみるとそこは無人の焼け野原だった。

土を掘り返せば、確かに小麦畑だった形跡は残っていたが、肝心の食料はない。

おまけについて最近埋められたと思われる井戸が見つかった。当然、水は得られない。

代わりに帝国軍兵士の死体が井戸の中に埋まっていた。

返ってこなかった偵察兵だ。この時になって、ようやく帝国軍は戦死者を確認した。

その間にも夜襲は続く。相変わらず、兵士を狙わないので互いの人的損耗はないが、食料はじわじわ減っていく。水も心もとない。この島は多雨だが、五万という大軍に十分な量とは言い難い。

帝国軍から、脱走兵が現れ始めた。

そんなわけで、アルヒアクツメル温厚な《緑》も憤っていた（無論、この《緑》とは彼のウルルにおける階位であり、彼にも個人名があるのだが、アーシルもこれで通っていた。アルヒイクシルと同じ発想で、この辺り同じく魔女の影響だろう）。

「あの連中にはまともに戦う気はないのか！」

「……条件次第ではあると書いてありますよ」

何度かの放火のついでに届けられた戦書を一瞥し、アーシルは指摘する。

「ちなみに推定アルヒイクシル直筆の戦書にはこう書いてあった。

『このままでは互いに損害が増すばかりである。そこで提案がある。アツザフル帝国軍は司令官アーシルウマイヤを含む十人の勇士を選出し、東部平原に来られたし。そこで互いの誇りを賭けて、小細工なしで真つ向から戦い、勝敗を決しようではないか！』

「……と、この後、詳細な時間と場所、決闘の手続きやその後について延々書いてあるんですが……。これ、我々には私を含む十人で来いと明記してあるのに、ティルナノーグ側が何人であるかはまるで書いていないんですよね……」

「そんな条件が飲めるわけがないでしょう！」

「飲めないなら、断固撤退するまでとのことです」

「……いじけた子供ですか、あいつは！」

「望んでいるのは勝利であって、勝負ではない——ということでしょう」

「目的を達成するためには手段を選らばないと？」

——目的を達成する者……か。

ふとアーシルは故郷の古い言葉を髣髴としてしまった。

「……馬鹿みたい」

この時、アル・イクシルの——テイル・ナーノグ連合軍の取った戦略は、前述の『三…焦土』と『四…遊撃』の間のような代物だった。

すなわち、連合軍は帝国軍よりも弱い。個々の兵士は剽悍だが、集団戦術がまるで身につけておらず、装備も劣る。故に戦ったら、負ける。だが、負けるわけにはいかない。だから戦わない。逃げる。強い奴には何をやっても無駄である。だから何が何でも逃げる。絶望的な現実からの逃避を徹底する。まさに孫子という

——正々堂々  
すなわち

——正々の旗を邀うることなく、堂々の陣を伐つことなし  
を体現した方針であった。とどのつまり、『強い奴とは戦うな』の一言に尽きる。

敵が来たら、逃げる。食料になりそうなものを根こそぎ持って逃げる。ついでに畑は焼き、井戸は埋めておく。いつもなら、後を考えて、必ず残しておく野や川の獣も鳥も魚もなるべく採り尽くし、草木には油をかけて火を付ける。

敵には領土を素直に明け渡す。麦一粒も得られない領土にした上で差し出す。どの道、帝国軍はこの島の詳細な地理を知らないのだ。彼らの進路を予測し、誘導し、先手を打つことは不可能ではない。ここでポウディツカの調査事業は大いに役立った（アル・イクシルは彼女がこの事態を予見していたのでは本気で勘繰っていた）。

無論、帝国軍が開き直って開拓事業などを始めたら、全力で足を引っ張る。火付け盗賊万々歳である。無能な奴でも有能な奴の足を引っ張ることは出来るのである。そして、向こうが本気で攻めてきたら、さっさと逃げる。

帝国軍の兵站は強靱で優秀だが、補給線が長い事に変わりはない。

そこを突いている。

\*\*\*

一方の連合軍にも悩みがあった。

それこそ、星の数ほど問題を抱えていたが、少年プラスにとって、頭痛の種になるのは膨大な事務処理作業だ。

何しろ、この島国には未だ大陸のような整備された官僚制がない。それどころか、読み書きできる人間自体が珍しい。四則演算をこなせて、複式簿記まで扱える者となると、本当に数えるほどしかない。

しかし、まともな作戦行動をするともなれば、当然その辺りを精密にやっておかねばならない。食糧の備蓄や移動に誤りがあれば、敵より先に味方が飢えかねないのだ。

繰り言になるが、帝国軍には、この手の事務処理に長けた人間が大勢いるのだろう。だが、連合軍には希少である。

プラスはその希少な一人だった。

だから、酷使される。

結果、報告書を徹夜で仕上げ、ふらふらしながら、上司に手渡しにいく羽目になる。

「ご苦労様」

アルⅡイクシルは報告書を受け取って、すぐに読み始めるものの、その声には精気が乏しい。心なしか臉も重そうだ。

おそらく彼も疲れているのだろう。同情しながらも、プラスは持ち場に戻ろうとする。

だが、その背に

「でも、計算間違ってるね」

という声が飛んできた。

プラスは驚いて、書面に向かう。

アルⅡイクシルの指先がトントンと幾つかの数字を叩いた。

——あ、間違っている。

すぐに大雑把に検算してみたが、アルⅡイクシルの示した数字はすべてプラスが計算をしくじったところだった。

単純な繰り上げの誤りが殆どだ。疲労が原因なのは明白である。しかし、それは言い訳だ。それこそ、アルⅡイクシルも条件はプラスと同じか、それ以上に悪いのだから。

「申し訳ありません。すぐに直してきます」

プラスは勢い良く頭を下げた。しかし、

「いいよ。僕が直すから、君は珈琲カフェでも入れていて」

「で、でも、これは僕の……」

「時間がないから、さっさと終わらせたいんだ。あ、これは命令ね」

命令と言われれば否はない。だが、プラスは珈琲を入れるために走りながら、憤懣やるせなかった。プラスにしてみれば、『君は無能だ』と言われたも同じである。珈琲にした

ところで贅沢だと思わないでもない。そもそも、アルⅡイクシルはプラスの仕事なめてはいないだろうか？ あの報告書は仕上げるのに一晩かかったのである。部分修正のみとはいえ、それを珈琲一杯入れる間に終わらせるなど……！

意地になって、てきぱきと珈琲を入れ、アルⅡイクシルの元に戻る。すると賢者はすやすやと仕事机の上で眠っていた。

——この人も疲れているのだ。

その点は心底同情し、珈琲を渡すために近づくと、アルⅡイクシルはパツと目を覚ました。どうも簡易結果が張ってあったらしい。

第三世代巫術の便利さに舌を巻いていると、アルⅡイクシルは「念のため、修正部分だけ、検算して」と件の報告書を差し出してきた。

珈琲と書面を交換し、賢者が一服する間、少年は必死に上司の誤りを探そうとした。だが、その修正は完璧だった。

帰り道、プラスはこれが挫折というものかと考え込んでしまった。

アルⅡイクシルは以前語った。

『プラス君は実に可愛い。何が可愛いって？ 僕を見る時のあの敬意の裏に潜む軽蔑がたまらないだよ！ 表向きは取り繕っているけれど、本音では——俺が貴様ぐらいの歳にはもっと高いところにいるからな——って考えているところがまさに超・絶・美少年！』

……その評価は正しい。プラスは言うまでもなく美少年だし、アルⅡイクシルの事を一面で尊敬しながらも、確かに軽蔑もしていたのだ。

それでもプラスはこの島一番の知恵者を目指している。そして、ボウディッカの覇業を支えるのだ。そのための努力も怠ってはいない。三十路を過ぎて、探求士の底辺を這いずり回っているアルⅡイクシルと一緒にしてもらっては困る。

無論、現時点ではアルⅡイクシルに及ばない。だが、それも当然の話だ。

自分はまだ十四、アルⅡイクシルは三十である。まだ彼の半分も生きていない。及ばないのは自然であり、今は習うのが必然である。

そうプラスは考えていた。アルⅡイクシル自身、それを見透かし、また認めてもいた。だが、こう力の差を見せつけられると、それだけではないのかもという気になってくる。ひよっとしたら、プラスとアルⅡイクシルの間にはもつと大きな壁があるのかもしれない。それこそ、年齢や経験では埋められない断絶が……、

「——やっぱり、ウルルの探究士って、凄いな」

「お前、あいつのことを何だと思っていたんだよ」

突如現れたボウディッカは独白に釘を刺した。

「あの《クウエリリイキテイヒリ真、明らかなる時》とかいう巫術一つで力量はわかるだろう？」

妖艶に微笑むボウディツカは驚くプラスの頭をポンポンと叩いた。

「でも、本人は盗作だって」

「阿呆。それは盗作できる実力はあるということだ。お前にあの巫術を再現できるのか？」

「それは……」

プラスは愕然とした。

——できるわけがない。

この前、余興で現物を見せてもらった。原理すらも教えてもらった。プラスにも言語巫術の心得はある。だが、それを再現しろといきなり言われても、できるわけがない。巨大な塔の姿を見る事と、実際にそれを造り上げる事はまるで別だからだ。

例えば、あの『さらし』に直接触っていたアル||イクシルは何故感電しない？ 肌の間に絶縁体でも仕込んでいたのか？ いや、そもそも、それだけの電力をいかに確保する？ いやいや待って待って……。

「……」

プラスは脳裏で想像するだけで、次々と沸きあがってくる困難に立ち尽くしてしまう。実際に再現実験に取り組めば、さらなる困難が待ち受けているだろう。

ここでようやくボウディツカの言葉を理解した。

当人は盗作だと謙遜していた。だが、それはボウディツカの言う通り、盗作するだけの実力はあることを意味するのだ。

教えてもらったわけではない。隣で見ただけの技術を、そのまま写し取ったのだ。伊達に十年以上もウルルでしごかれてきただけのことがある。

「だが、あまり、期待しない方がいい。奴は所詮白衣——最下級の探究士、未だ階きざはし一つ上れぬ落ちこぼれだ」

「でも、僕からすれば凄ウラマイい探究士だよ」

「だから、敵軍にはそれ以上の探究士がゴロゴロいるってことさ」

「あ……」プラスは頭を抱えなくなってきた。「何だか、嫌になってくるよね。それ……」プラスは自分の頭に自信を持っており、それは既にこの島の誰もが認めている。その上、一日も欠かさず勉強に励んでいる。ところがそんなプラスですら、アル||イクシルには遠く及ばず、そのアル||イクシルもまた帝国においては落伍者の一人でしかない。

「……だから、逃げたんだろう。あの男は」

言葉にしてから、ボウディツカは自分の言葉に重みがあることに気付いたらしい。

「そうだな……人生は遊戯ではない。しかも、あいつは既に学生ではない。分の悪い勝負を続けることは出来ない。遊戯なら、負けても笑って済ませられるが、人生はそうはいかない。学生ならば、負けてもその頑張りを褒め称えられるが、人生はそうはいかない」

勝たねばならない。負けてはならない。プラスはその一見、当然の、しかし、それを徹底しようとするれば酷く困難な命題を思い知った。

「……彼がアツザフルに逆らった理由って……」

「帝国の既存システムの中では勝てないと判断したからだろう。あの男にとって何が勝利であるかは、存外、当人よりもあの奴隷の方がわかっているみたいだが……いずれにせよ、その行動原理は逃避だ」

「——勝率が低いなら逃避する。負担が大きければ逃避する。すべては勝つために。成功したときの報酬が少なければ、逃避する。失敗したときの損害が大きければ、逃避する。すべては負けないために」

「それが【古き女神の教え】……か」

ボウディツカは自嘲する様に言った。

プラスが思いついたのだから、ボウディツカにもわかったのだろう。アルイクシルが口にした【古き女神の教え】とは、かつてのティルナノグの民の有り様そのものだ。土地の争いなどには執着せず、異民族との不和の兆しがあれば、一方的に立ち去るという手段で解決していた民族のあり方なのだ。

臆病で懦弱な羊のような生き方だ。

ボウディツカはそんなかつてのティルナノグを毛嫌いしていた。その弟として育ったプラスも似たようなものだ。ボウディツカが実母である女王を憎んでいるのも、あの女王は一見毅然としているものの、その内側に【古き女神の教え】が根付いているからだ。

斬るべき男を斬らない。

犯すべき国を犯さない。

滅ぼすべき民を滅ぼさない。

そういう懦弱さを憎んですらいた。

だが、それはあの女王アンドラステが今のアルイクシルと同じ境地に到達していたからではないのか？

かつて、ティルナノグの民が常に逃避を続けていたのも、それが最も犠牲が少ない合理的な選択だったからではないのか？ そもそも、こんな北方の島国に人間が住んでいる事自体、逃げて逃げて逃げ続けた者たちの生存戦略の正しさの証ではないのか？

今回の戦にしてもそうだ。対等の条件では勝機がないから、非対称戦を徹底するというのがアルイクシルの方針だ。それは逃避でもあるが、同時に勝利への最短距離でもある。

それがわかっていなかったという事はつまり……

「……あたしもまた親の庇で甘えていたということか……」

プラスよりも先にボウディツカが自嘲した。

だが、すぐに頭を振り、声音をからりとしたものに変えた。

「さ、次の仕事に取り掛かれ。事務作業においては、お前が勝利の鍵だ」

「……僕が？」

「あいつがいくら頑張っても、向こうにはあいつ以上の人材がごろごろいる。あたしは人間の能力にそれほど差があるとも思っていないから、あいつの必死で人材の差を『埋める』ことはできると信じたい。だが、『超える』のは無理だ。それこそ、あたしは人間の能力にそれほど差があるとは思っていないからな」

「……彼の力ด้วยやく我らは対等になる。勝つためには他の要素が必要になる」

「そうだ。勝つためにはあたしらの力が必要だってことだ。『地の利』の力——地元出身の意地を見せてやれ」

\*\*\*

最早、ティル・ナ・ノグ連合軍の意図は明白だった。

兵糧攻めだ。

そのための焦土作戦だ。兵士を極力狙わないのも、食料が減る速度を遅らせないためだ。だから、ほとんど交戦はしない。五万という数に帝国軍が自滅するのをただひたすら待っているのだ。

帝国軍は断じて補給や兵站を軽んじてはいない。だが、大海リヴァイオンをこえて大陸バハムトから、兵糧を大量に運ぶのはそも無理がある。だから、最初に運んできた食料を食い潰しながら、『現地調達』を図るしかないのだが、それが徹底して、邪魔されている。

それでも、一度だけ原住民がまともな攻撃をかけてきた事があった。

勿論、あっさり返り討ちにしたが、果たしてそれでよかったのかは難しいところだ。

——佯敗すべきだったかもしれない。

アーシルは少し悔やんでいもいる。

その無謀な攻撃を仕掛けてきた連中は、調べてみると、アンドラステとは縁が薄い部族だった。さらにアル・イクシルの消極策へ反発していたという。それをまんまと撃滅したアーシルは、視点を変えれば、アンドラステの一族とアル・イクシルの戦略の正しさを証明したようなものだ。

結果として『ティル・ナ・ノグ連合軍』におけるアル・イクシルの指揮権の強化に繋がっただろう。

いや、そもそもアル・イクシルが見せしめを狙って黙認した可能性すらある。

「……疲れているのかしら？」

アーシルは思わず自嘲していた。

もつとも疲れているのはアーシルだけではなく、末端の帝国軍兵士も同じだ。

何しろ、毎晩のように夜襲を仕掛けられている。さすがにもう食料を失う事はなくなってきたが、代わりに疲労は蓄積する。むしろ、敵の目的が精神的な嫌がらせに移ってきていると見るべきだろう。

「いっそ、兵团を幾つかに分けては？——という意見も上ったが、これはアーシル直々に一蹴した。」

理由は語らなかったが、頭が回れば、推察できるだろう。確かに兵团を分割すれば、食料の確保はし易くなる。だが、それでは各個撃破の対象になる。万単位で固まっているから、原住民もうかつに手が出せず、被害が食料物資にのみ抑えられているのだ。地理に不安なこの状況で、戦力を分散すれば、本当に一軍や二軍は殲滅されるかもしれない。そも、アツザフルの兵士がティル・ナ・ノグの戦士に勝るのは、その組織力と統率力であって、個々の武勇ではない。なるべく大きな集団で戦わないと、帝国兵に勝ち目はないのだ。

そんな中、運よく捕虜にできたティル・ナ・ノグ兵を尋問した事がある。当然、有望な情報源として期待された。しかし、その記録はとても公開できるものではなかった。

「戦士を狙わず、食料を狙う。勇猛と名高いティル・ナ・ノグの民も墮ちたものですね」

「『無能とまともに付き合っではいけない』というのが賢者様のお言葉でね」

「我々が無能？ では、その我々に追い詰められているあなたは何なのですか？」

「犬と熊が一騎打ちをすれば熊が勝つ。しかし、それを以って熊が有能とはいわん。だが犬は違う。獣を払い、臭いを追い、橇を引く。それらを以って犬は有能といわれる。人を幸福にする存在こそが有能であり、そうでなければ、無能だ」

「……あなた個人を幸福にする事は不可能ではありません」

「いや、あなたは無能の典型だよ。少なくとも、俺達を幸福にできそうもない」

「……アル・イクシルにはできませんよ。そんな事は」

「そうですね。じゃあ、さっさと失礼させてもらいますよ」

そして、彼は壁に頭を打ち付けて死んだ。

尋常な有様ではない。アーシルの目には狂信者の姿に見えた。

「ああも見事に命を投げ出せる男が……あのアル・イクシル・ディアウスのような男に従っているとは……」

「自殺など、所詮は負け犬の逃避ですよ」アーシルは思わず唇を噛んだ。流れる血の味は苦々しい。「生きて現実と戦おうともしない男だからこそ、あのアル・イクシル・ディアウスのような愚か者に従っているのです」

「自殺など所詮は逃避にすぎないと何故わからないのかしら？ これだから男という生き物は……！」

気がつくと《緑》は奇妙な目でこちらを見ていた。考えてみれば、彼らの前で声を乱したのは初めてだったのかもしれない。

アーシルは一瞬とはいえ冷静さを失った自分を恥じた。

「すいません。指揮官にあるまじき振る舞いでしたね」

「い、いえ……」

「いずれにせよ、あの台詞はこの辺境の厳寒を生き抜いてきた男に相応しくありません。むしろ、いじけた引きこもりの発想です。どうせ、帝国の庇護でぬくぬくとしてきたアルイクシルの影響でしょう」

「……作戦行動全般にも、アルイクシル・ディアウスの影響が散見されるのですが……」  
「ええ、正面決戦を避けている。というよりもまともに戦う気がありません。こちらの補給線の寸断と焦土だけを純粹明確な目標としています」

——『遊びでやっているんじゃないんだ。負けたら終わりなんだ。誰が強い奴とまともに戦うかよ、バーカバーカ』

下品なアルイクシルの声がどこからか聞こえてきて、アーシルは不快だった。  
「遊撃戦で来るとは想定していました。こういう局面では通例かつ有効ですし、中央集権化がされていない辺境軍にはこういった『戦術』しかない」

「とはいえ、体系化された『戦略』として、徹底させてくるとは予想外でしたね。辺境の発想とはかけ離れています。頭でっかちな都市居住者の発想です」

夜襲も略奪も蛮族の特技だ。そういった戦術を原住民が選ぶのは不自然ではない。だが、戦略として、それを徹底させ、帝国軍を滅ぼそうとするのは不自然だ。

こういった島国は降水量が多い。それ故に植生が豊かで、食料は大量生産こそされずとも、ある程度までは山野から拾い集められる。そういう土地で、小競り合いを繰り返していると、籠城ならばともかく野戦で食料が尽きるという事態そのものが想像し難いのだ。

無論、現実には万単位の兵を動かせば、どんな土地であろうとも、食料の減りがとんでもない事になる。戦闘があるうとなかろうと、兵糧攻めは極めて有効である。だが、そもそもテイルナノグでは万単位の兵士など、滅多に現れない。だから、そういった通念が浸透していないはずなのだ。

ところが今回のテイルナノグは真つ先に、しかも明確な目標として、そこに付け込んでいる。

そこにアルイクシルの影響があったことは疑う余地がないだろう。

はるか後世にはこの戦略、

——愚図クシククトル

と呼ばれることになる。これは一度たりとも勝てた例のないアルイクシルの戦術、ひいては人生が罵られたのが原因である。

しかし、それは原因であって結果ではない。

クイントゥス・ファビウス・マクシムス・ウエルコスス・クンクタトル——あるいは【ローマの盾】と呼ばれた男をアーシルは思い出していた。

あの【ローマの盾】も、今のアルルクシルとほぼ同じ戦略で外敵に挑んだ。彼の二つ名の『愚図』とは本来その弱腰への侮蔑だった。しかし、その意味は『慎重』へと変化していた。後にこの手の持久的な戦略は『ファビアン戦略』と呼ばれる程だ。

アルルクシルもまた愚図である。だから、同じ事をやろうとしたのだろう。だが、アルルクシルは【ローマの盾】ではない。

仮に【ローマの盾】のような偉人と自分を重ねていたのなら、それは勘違いも甚だしい。

この『ファビアン戦略』は口で言うのは容易いが、実現はその限りではない。

例えば、進路を予測し、誘導し、先手を打つことは不可能ではないが、困難である。ましてや、こういった『ファビアン戦略』をアルルクシルが知っている以上、相対するアーシルもまた知っているのだ。当然、対策は考えている。

そもそも、畑を焼き、井戸を埋めるとなれば、そこに住む者の生活を破壊する。不満が残る。テイルナノグ連合軍が血と汗の結晶たる住処を破壊するのならば、自分はアツザフル帝国軍に味方する——と考える者がいても不思議ではない。いやむしろ自然である。チーシュイの指摘は全くの正解だったといえる。彼らには補填を行わねばない。しかし、ただでさえ、焦土作戦を敢行し、生産能力が低下している《妖精の楽園》で……どうやって？ しかも、アーシルウマイヤは当然そこに付け込む。すなわち

「連合軍は畑を焼き、井戸を埋める。これは圧政である。帝国軍はそれを倒すためにやってきた解放者である」

と喧伝するのである。第一文は正当であり、第二文も妥当であり、第三文も誤謬かどうかはわからない——となれば、これに靡く者も少なくない。まして、アーシルウマイヤのような美貌の娘に、耳元で囁かれれば、騙される奴は数知れない。アルルクシルがいくら「魔女の奴隷が魔女以外に情を持つわけがないだろう！」と説いても、悲しいかな三十路男の言葉は常に軽んじられる。

「ならば、こちらもボウディツカ姫に生まれたままの姿で大義を示してもらえば！」

とアルルクシルが提案したら、いきなり、プラスが物凄い勢いで斬りかかって来た。……いや、あれは死ぬかと思った。実際、チーシュイが間に入ってくれなければ、死んでも裸同然の格好なんだから、別に構いやしないだろうに……。明らかに異常だった。どうせい

——ああ、異民族の考えることはわからん。

いずれにせよ、この『フアビアン戦略』は難しい。【ローマの盾】フアビウスが偉大なのは『フアビアン戦略』を提案したからではない。完遂したからである。それだけ有能な政治家であり戦略家であったからである。

だが、アルⅡイクシルはフアビウスではない。

「故にこそ、直視してもらいましょう。万人が逃れえぬ《現実》の鎖というものを——！」

\*\*\*

——直接自分の目で帝国軍本陣の状況を確認したい。

そんな殊勝な事を言ったのが間違이었다かもしれない。

アルⅡイクシルが偵察しようとして近づいた途端に発見され、帝国軍に追いかける羽目になった。

火付け盗賊で嫌がらせを繰り返していたため、帝国軍の敵意は頂点に達しており、物凄い剣幕だった。当然と言えば当然だが、おかげで森の中を涙目になって逃げ回った。

それも三日三晩、食うや食わずである。

とはいえ、これは予想通りだった。

予想外だったのは兵数である。

こちらはアルⅡイクシル自身とポウディツカと他三名——総計五人。

対する帝国軍は途中で兵士が合流を重ねて最終的には——推定千人。

わずか五人の偵察を専任で追いかけてまわっているのである。過大な兵数と言う他ない。

——僕がここにいる事がバレている？

つまり、アルⅡイクシルを仕留める好機とみているのだとしたら……。いや、そこまで確定的でなくとも自分たちを逃がしてはならない、倒すべき相手と考えているのだとしたら……。

「よし。うまく、迷走してくれたっ」

「迷走？」とポウディツカが皮肉げに返す。「あいつら一直線にこちらを狙っているように見えるんだがな？」

「今、彼女はこのアルⅡイクシル・ディアウスに拘泥しています」アルⅡイクシルはニヤニヤ笑いが止まらなかった。「わかりますか？ 二十歳にもなっていない才色兼備の若い娘が、未だ階きざし一つ登れぬ三十路男を追いかけているんです——そう、この僕を！」

「……あんだ……」ポウディツカは何故か薄気味悪そうだった。

「ふふふ、奴隷を求めたエジプト人と同じですよ。僕らとの戦闘を必要とし、同時にそこに依存してしまった」

妨害など無視して、あくまでも強引に開拓を推し進められれば、アルⅡイクシルたちは辛い立場に追い込まれていただろう。あるいは手ごろな原住民を虐殺し、挑発し、こちらから攻撃せざるを得ない形にするなど、ボウディッカには言いづらい方法もあった。そして、味方部隊が軍事物資などを餌に佯敗で釣り出される事を心底恐れていた。

だが、彼女はあくまでもティルⅡナⅡノグ連合軍を——アルⅡイクシルを潰さねばならない害虫と認識してくれたようだ。

「このまま我々の本陣に戻りましょう。合流後、追跡部隊を反転迎撃します」  
「本陣位置がばれるぞ？」

「構いません。どの道、そろそろ本陣を移動しなければいけない時期でした。この際、敵の兵力を削っておきます。本陣兵力となら彼我戦力比は一对十以上——捷かてます。戦略方針からは外れますが、たまには攻勢を経験させ、士気を維持するのも、戦術上……」  
そこまで言いかけて、一向は森林を突破した。

だが、一気に開けた視界にアルⅡイクシルは絶句することになる。

「……味方の兵を切り捨てて、こちらを会戦に引きずり込んだ……あいつ本当に新人か？」

ティルⅡナⅡノグ連合軍本陣には対峙するアツザフル帝国軍主力の姿もあったのだ。

アルⅡイクシルの一言の意味は時間経過と並列説明していこう。

何とか辿り着いたティルⅡナⅡノグ本陣は恐慌状態にあった。

当然だ。突如として本陣と目と鼻の先にアツザフル帝国軍が布陣していたのだ（あの追跡兵千名もこの一環だったのかもしれない）。まだ戦端が開かれていないため、軍律が保たれているのは唯一の救いだった。

非対称戦のために隠匿されていた本陣が帝国にバレているのはいい。そろそろ、バレる頃だとはアルⅡイクシルも予想していた。だから、ティルⅡナⅡノグ連合軍は本陣移動のための準備も整えてあり、ある意味そのための偵察だった。

ところがその偵察から戻ってくる間に、帝国軍は連合軍の眼前に布陣を終えていたのだ。

少なくともアルⅡイクシルたちが敵本陣を調べている時にこんな気配はなかった。

……いや、『気配はなかった』という省略が過ぎる。そもそも、ある種の兵糧攻めをしている以上、敵の物資輸送は神経質に見張っているのだ。あの時点で敵の本陣に数万の兵士を養うための兵糧が蓄えられたままである事を確認済みである。

だが、現実に敵軍の主力は既に移動を完了している。

答えは一つだ。

予想よりやや早く連合軍本陣位置を察知した帝国軍は、気取られないように兵糧の類を

一切持たず、全速力で連合軍本陣の前まで駆け抜けてきたのだ。それこそ偵察用の軽量機動装備のアルルクシルたち五名よりも早く。

神速の行軍——などという美麗なものではない。

無謀な強行軍である。

これでは、いかに訓練を重ねた帝国軍兵士といえども落伍する者が後を絶たないはずである。実際、後で確認してみたところ、この時点で帝国軍の数は二万まで減っていた。一目して大要をつかんだ際の『味方の兵を切り捨てて』とはそういう意味だ。

いや、それ以上に万を超える人間が何の用意もなく移動すれば、補給に問題が出る事は避けられない。これは自軍領地であつても言える事なのだから、未知の敵地では尚の事だ。

これで確実に帝国軍の兵站は崩壊する。もはや長期戦は帝国軍に不可能だ。

だが、次の一戦でアルルクシルたちを屠ってしまったえば、長期戦は不可能である以上に不必要になる。

そして、二万まで減った敵兵数とは、二万も残った敵兵数を意味するのだ。

——さすがは阿翦アイチエンの奴隷アイチエンだな。教えられたよ。

思い出してみれば、阿翦アイチエンはよく『兵は【拙速】を尊ぶ』と口ずさんでいた。ところが当時十一歳の自分は『それを言うなら【神速】では？』と首を傾げるばかりだった。馬鹿馬鹿馬鹿、僕の馬鹿。【神速】は神の速さで動けば素晴らしい——そんなのは当たり前だろ。だけど、そんな理想通りにいかない現実の戦場でどうするかを彼女は説いていたんだ。【拙速】は拙くとも速く動けば素晴らしい——とわざわざ優先順位まで付けて教えてくれたのに……ああ、僕の馬鹿！

が、生憎、諸将の前でそんな称賛や愚痴を口にする事は許されない。

「結論から言います。囲まれました。我々の後ろは山ですから、逃げようがありません」

「包囲されているという事を、逆に言えば、相手の戦線は伸び切っているという事だ。確個撃破に持ち込めば勝機はある。そもそも兵数が隔絶しているわけではない。ここは急所となる左翼を攻めるべきだ」

ボウディツカは兵力ではなく兵数と言った。慎重な意見である。だがそれでも、

「樂觀がすぎます。それは不可能です」

とアルルクシルは断言せざるを得なかった。

「彼らは戦士ではなく兵士なのです」

すなわち、徹底的に集団戦の訓練を受けた軍団である。気が遠くなるような反復の結果、彼らは集団で一個の生物として機能するほどの連携を見せる。すなわち、左手を掴まれた者が反射的に右手で殴り返すように、左翼が攻められれば、右翼が相手の後ろに回りこみ、挟み討ちとする。

ボウディツカの頭には、挟み討ちの形になる前に、戦力が分散している左翼を撃滅する

構図が浮かんでるのだろう。なるほど、相手がティルノグの戦士ならば、不可能ではない。左翼が攻められた時、右翼の者たちが瞬時に最善手を選ぶのは難しいのだ。その間隙を突いて勝利を得た例は少なくない。

だが、アツザフルの兵士たちは、その間隙を徹底して埋める訓練をやっているのだ。一瞬の暇もなく集団としての最善手を打ってくるに違いない。

「しかし……」

とボウディツカは食い下がった。理屈はわかるのだろうが、実感が湧かないのだろう。何しろ、そういった『集団として機能する兵士』という存在がこの辺境にはない。だからアルノイクシルは

「ボウディツカ、これ以上の発言は抗命罪とみなす。チーシュイ、以後本会議で彼女が口を開いたら、即座に斬首せよ」

と黙らせた。あえて彼女を呼び捨てにし、かつ俊厳さを見せた。それだけの判断であると示したのである。しかし、これは周囲のざわめきを呼んだ。何しろ、ボウディツカは仮にも王女であり、アルノイクシルは所詮頭でっかちの余所者に過ぎない。

だが、さすがにボウディツカだ。アルノイクシルの意図を読んだらしく、彼女は無言で引き下がった。

そこで入れ替わるようにプラスは挙手した。

無言で発言を促すと彼は

「偽兵の可能性は？」

と述べた。つまり帝国軍のこの包囲は見事である。だが見事過ぎると言いたいらしい。

「大量の人間が一糸乱れぬ動きを迅速に成すのは難しい事です。思うに、あれは少数の兵に多数の旗などを持たせ、実態よりも多くの兵に見せ、こちらを攪乱する罠なのでは？」

このプラスの言葉に、ティルノグの人間は心を傾けた。ありそうな話であるし、何より、十四の少年の発想がそれなりに『知的』であることに好感を抱いたらしい。ティルノグも武勇だけでないという自負が生まれつつある。だが、アルノイクシルは

「あれは偽兵ではない」

と再び断言した。そして、無用の議論を終わらせるため、ただ一文を付け加える。

「諸君らに義務づけている定期偵察がそれを証明するだろう」

\*\*\*

その夜、チーシュイは感嘆の言葉を口にした。

「大見得を切ったもんだなあ」

「……実際、的中したろ」アルノイクシルは他に人がいないので、素に近い口調だ。「君だ

って帝国軍と戦い、帝国軍として戦った経験を持つ。ならば、彼の言う『難しい事』をなすための訓練を帝国軍がどれだけ重ねているかは知っているはずだ」

「まあな。しかし、それは可能であるというだけで、実行するという根拠にはならないだろう？」

「……君も小賢しい事を言うようになったな」

アルリックシルは苦笑した。無論、帝国軍は偽兵を用いないという根拠は別にもあった。ただ、あの場では言いにくかったのだ。

——《魔女》ならば、虚ではなく実を選ぶ。ならば、その《奴隷》も同じはず。というのがそれである。

偽兵とは所詮虚詐だ。小細工といってもいい。それは弱者の業だ。

そんなものに頼らず、実力で正面から圧殺する。それが強者の業だ。

強者たるアーシルウマイヤは後者を選択するであろうと推測したのである。

（実際、少し前にアルリックシルが帝国軍の指揮官ならば、負けたふりをして、相手を釣り出す局面があった。しかし、あの時もアーシルウマイヤは迷わず勝利をもぎ取った）

もつと言えば、アルリックシルの用兵がこれまで大きな誤謬を犯さなかったのは、同様の理由で帝国軍の動きが薄っすらと読めたからだ。

——『何故か？』と問われれば、『敵軍指揮官が魔女の奴隷だから』に尽きる。

魔女の奴隷の思考は魔女そのものに似る。奴隷たちは魔女に魅了されきっているために、模倣に走るからだ。

そして、アルリックシルにはその根源たる魔女の発想がおおよそだが量れる。

魔女にとってアルリックシルは路傍の石に過ぎないが、アルリックシルにとって魔女は高嶺の花である。それ故に、アルリックシルは生涯を費やして、彼女の思考を研究し、分析してきた。誰よりも執念深く、根気強く、粘着質に追い求めてきたのだ。

だから、その劣化量産型ともいうべき雌<sup>ウマイヤ</sup>奴隷の思考も見通せるのだ。

とはいえ、そんな事を口に出せるわけではない。

「いずれにせよ、この予言を的中させたことで《白衣の賢者》の評価は高まった。明日の決戦は最後まで《白衣の賢者》の指揮に従ってくれるか？」

「僕の指揮に従う意思は生まれた——生まれてくれないと困るといのが本音だね」

あの時、アルリックシルが力強く断定したのは、指揮権を一本化させたいという意図が大きい。ある種の予言を的中させ、アルリックシル自身に指揮官としての重みを持たせたかったのだ。

最も困るのは『あんなへなちよこの命令に従えるか！』と諸将が勝手に動く事なのだ。ある意味、最も自然な流れだが、そうなれば、アーシルウマイヤは帝国軍を手足のように動かす、それこそ皿の上の肉を切り分けて平らげるように、元・辺境連合軍を各個撃破す

るに違いない。

ボウ・デイツカがアル・イクシルを立ててくれたのも、多分それ故だ。アル・イクシルの判断が正しいかどうかはともかく、指揮権の所在が不明瞭という状況だけは避けたかったのだ。アル・イクシルもボウ・デイツカもこんな軍略に挑んだことがない。どちらの力量も未知数である。いずれが上かなどわかるはずもない。しかし、二人が共同して指揮をとれば、その結果はどちらかが単独で指揮をとった場合を下回るのは確実なのだ。

「しかし、テイル・ナノグの戦士たちには指揮に従う意思があっても能力がない。小規模遊撃戦ならともかく大規模集団戦については訓練や経験はおろか、知識ですら皆無だろうからなあ……」

これではアル・イクシルとしては凸形の密集突撃陣形——いわゆる『魚鱗』で中央突破を図るしかない。

ところがアーシル・ウマイヤが凹形の包囲迎撃陣形——いわゆる『鶴翼』で包囲殲滅を狙っている。

ボウ・デイツカに至っては先刻こっそり、

——「……蛇の大口に自ら飛び込む鼠だな……ま、男らしくていいんじゃないか？」

と下品な事を囁いてきた。ただし、この陣立てそのものに反対はしかなかった。所詮は烏合の衆であるテイル・ナノグ連合軍には他に手段がないのだ。密集しているため部隊間の情報伝達がし易い『魚鱗』だからこそ、かろうじて、軍としての集団行動が行える。

これが散開しているため部隊間の情報伝達が難しい『鶴翼』などでは、戦う前にバラバラになってしまいうらない。

……しかもこの発想すら実に理屈だけのものである。それも底本になっているのは、講談や小説であって、正規の兵書ではない。

——そして、その盤上の遊戯ですら、この弱さだ。

ほぼ黒一色に染まった碁盤にアル・イクシルは愕然とする。

「……君ってさ。どうして、この囲碁という遊戯がこんなに強いのかなあ……」

「そりゃ、俺の国の遊戯だからな。得意分野で負けるかっての」

「ここまで洗練された遊戯に国籍などないよ」

「そんなものかね」

ふむ、原型は占いか？ 陰陽思想が根源にあることは間違いない。だが、明らかに戦術、いや戦略シミュレーションの要素が混じっている。地は領土、石は兵力に対応するわけだ。そりゃ、四方を囲まれば、『死ぬ』よな。それでいながら、石（駒）はすべて等しい存在であり、しかも、盤上すべてに置ける——戦略の自由度は確実に将棋シヤトランジよりも上だ。

「どうでもいいから、そろそろ次の手を打てよ」

「……ありません」アル・イクシルは投了した。

「九子置かせて、俺の三目勝ちか。俺が指導基だったとはいえ、強くなつたぜ。そろそろ、俺との力の差がわかってきた頃か？」

「……こないだまで、数は二十まで数えるのが精一杯だった男が……どうして、目算は一つの狂いもないんだ？」

急いで整地をしたアルルクシルであったが、チーシュイの言葉はやはり正しかった。

「右辺の攻防、ダメヅマリで白が中から逃げ出す手が新しく生じた事は、よく覚えておけよ。状況が変化すれば、それまで有効でなかった手が新しく生まれるという典型だからな」

「ああー、もう、失策が運良く妙手に化けたのに、それでも完敗とは！」アルルクシルは文字通り地団駄を踏んだ。「それより、質問に答えなよ。どうして、目算が出来る？」

「んーなんとなく……だな」

「……なんとなく——ねえ」

彼の言葉は時にアルルクシルを混乱させる。

何しろ、圧倒的に語彙が貧困なのだ。アルルクシルが彼の母語である夏語に切り替えてやっても、抽象的な話になると途端に口ごもるようになる。

『なんとなく』

それは天啓と呼ぶべきモノなのだろうか？

一流の探究士にはそういうものがあるらしい。実に妬ましい話だが、あの連中には時に過程を超越して、真理を看破するところがある。

そして、それはこのチーシュイも同じだった。囲碁だけではない。教養など皆無の癖に、しばしばアルルクシルをハツとさせる一言を口にする。おまけに、どうしてそういった発想に至ったのかを問い詰めると『なんとなく』で済ませてしまうのだ。

だから、アルルクシルは仮説を立てた。

「チーシュイ、君ってもしかして『預言者』？」ネビーイーム

「……なんじゃそりゃ？」

「かつての世襲制巫術師たちが『巫女』と呼んだ——僕らがある種の受動的巫術師だと考えている存在さ」

「……読み書きもろくに出来ない俺が巫術師様の訳がないだろう。第一、俺は男だぞ」

「意識せずに、巫術を用いているかもしれないから、『受動的』なのさ」

実際、チーシュイの干渉力は馬鹿でかい。ただ、無教養であるがゆえにそれを意識的、統制的に使いこなす言語巫術の類はさっぱりであるだけだ。しかし、強大な干渉力が『受動的』に機能している可能性は否定できない。実際、チーシュイが剣闘などの際、驚異的な先読みをするのも（当人は「修練の成果」と言っているが）、識意下で精霊からの危険信号を受け取っているからと考えた方が、アルルクシルにはわかりやすい。

「それに『巫女』が『女』なのは、世襲制巫術師たちが女尊男卑著しい封建的な性質だっ

たからに過ぎないよ。実際には男の巫祝者もいたさ。君の国でも『巫覡』というだろう。あれは巫めかんなきと覡おかんなき——女の巫祝者と男の巫祝者を指すんだ」

この辺り、日本の梁塵秘抄りょうじんひしょうなどで『東には女は無きか男巫、さればや神の男には憑く』と語られた世界観に近い。要するに巫祝者というのは原則女性だったということだ。同時にそれは男の巫祝者がいなかったわけでもない事も示している。

その旨をアルⅡイクシルが説くと、チーシューイは奇妙な事を言い出した。

「いいだろう。お前が『救世主』になったら、俺も『預言者』ネヒーイムになってやるよ」

『救世主』メシヤだって。この僕が？」

「そうだ」

「……はははは。君が僕のことの過大評価しているのは知っていたが、そんな夢物語を信じているとは思わなかった」

「夢物語？」

疲れが溜まっているのだろう。あるいは気付けに用いた薬酒がまずかったのかもしれない。知らず知らずのうちに言葉が過激になっていた。

「あるいは弱者に都合のいい幻想というべきかな」

そして、その理屈はアーシルⅡウマイヤのものと大差がなかった。

とどのつまり、この日、この時、この瞬間までアルⅡイクシルは魔女の奴隷の一人ではなかったのだ。

だから、アルⅡイクシルは滔滔と語った。

「救世主メシヤというのは怠惰な者に特有の願望さ。何の努力もなくとも、何の研鑽もなくとも、ただ祈るだけで、どこかの誰かが問題を解決してくれる。その誰かが救世主——ご都合主義の極みだね。自分では指一本動かしたくない輩が、いい年して赤ん坊のように、誰かに世話をしてもらおう事を夢見てる……」

「ふざけるなっ！！」

その一連の動きには神御衣の能動防御すら間に合わなかった。アルⅡイクシルには反応はおろか認識すらできぬ速さだった。

気が付いたら、アルⅡイクシルの胸元は絞め上げられ、首筋から血が流れていた。

アルⅡイクシルがその事を理解するのには随分と時間がかかった。

「じゃあ、この世界は幻か？俺の人生は偽りか？ならば、その虚妄の力によって、その咽喉を搔っ切られてみるか？」

恐れはおろか痛みすら感じなかった。

チーシューイに大刀を突きつけられていたのだ。しかも彼の腕は震え、その刃筋が定まっていない。その卓越した技量を知る者には信じ難い事だ。

——心の乱れ故？馬鹿な、あのチーシューイが？

目の前の奴隷は、既に冷静沈着な凄腕剣闘士ではなかった。

「そんな理屈はな。奴隷になった頃、散々聞かされてきたよ……！」

気が付いたら、手足に鎖が付けられていたという。

目を覚ましたら、鼻骨を鞭で叩き折られたという。

激痛に耐えている間に『蟻と蝉』の話をされたという。

「夏の間、蟻は地道に働き、食べ物も蓄えていた。蝉は歌って遊んでばかりいた。だから、蟻は冬には蓄えを食べていたが、蝉は喰うものがなく、飢えるしかなかった。……だが、我々は慈悲深い。遊び呆けて飢え死にするしかない貴様らに【慈悲】を与えてやろう」だとさ。ちなみにその時【慈悲】で与えられたのは、賞味期限切れで棄てられた元配給品——腐った小麦の粥だったよ」

「……その話、君が遊び呆けていたという事が前提になっているが、その前提は……」

「馬鹿。正しいか否かを決めるのは、奴隷主だろ。奴隷がどれだけ頑張ろうとも、一瞬でも休息した事を取り上げ『義務を果たさない癖に、権利ばかり主張している』と断言できるから、奴隷主なんだ。奴隷が過労と栄養失調で何人死んでいこうとも、世界中を探せばあるもつと悲惨な例を取り上げ『自分達よりも不幸な者がいるという想像力がないから奴隷になるのだ』と断罪できるから、奴隷主なんだ」

今、刃物を突き付けられているアルルクシルと刃物を突き付けているチーシュイが非対称の関係にあるように——。

決めるのは自分ではない。常に他人だ。そして社会であり、世界である。

アルルクシル自身もほんの少し前に使った論理だ。だが、息荒く大刀を握っている奴隷には、全く別の事実として押し掛かってきたのだろう。

そんな彼が——彼らが『救世主』という幻想にすぎる事を責められるのか？

少なくともアルルクシルには……、

「その後、俺が剣闘奴隷になったことは知っているな？」

「……ああ」

「俺がそこで何人殺したかは？」

「……九十九人」

「そうだ。なあ、俺が殺した九十九人は、怠惰だったのか？」

「それは……」

「見せしめに両手両足の腱を斬られた奴がいた——俺はそいつを前に神に祈らずに努力しろと言うべきだったのか？ 道端で背中から包丁で刺された奴がいた——俺はお前が刺されたのは注意が足りなかったからだと言うべきだったのか？」

答える資格を持たないアルルクシルには沈黙しかない。

だが、チーシュイは自ら頭を振り、答えを導き出した。

「違うっ！ 絶対に違うっ……！」

そして、奴隷の腕から刃が零れ落ちた。柔らかな土と草がその刀身を優しく受け止める。

「八年前、お前が俺に救いの手を差し伸べてくれた日のことを……覚えてるか？」

「……ごめん。忘れてるみたいだ」

その言葉に奴隷は膝を付いた。そして、彼の双眸からぼろぼろと涙が零れ落ちる。

「そうだ。それでいい。お前は覚えていない。それがアル||イクシルという男にとって、当然の事であるが故に、記憶の片隅にとどめておくこともない。自分自身の弱さを誰よりも知るが故に、自分以外の弱さに手を差し伸べずにはいられない。——そんなお前だからこそ。俺は俺のすべてを捧げたい」

あるいは——彼は預言者ではなく、洗礼者なのかもしれない。

さもなければ、哀れな子羊だ。

「すまなかった。俺はお前の奴隷だ。臥龍丘のチーシュイはアル||イクシル・ディアウスの剣だ。道具だ。消耗品だ。この連中を見捨てて逃げ出すというのなら、喜んで手伝う。そのための捨て駒として死地に赴けというならいくらでも赴いてやる。……だが、二度とそんな事を言わないでくれ——俺はお前まであんな連中と同じだなんて思いたくはない」

そして、賢者は覚醒する。

「……わかった。これは契約だ」

誰か、ではない。いつか、ではない。

僕がやる。今やる。

僕が今、この眼前にいる世の弱き者を救う主となろう。

「君を奴隷にした時の旧き契約ではない。新たなる契約だ。——僕は君のための《救世主》<sup>メシヤ</sup>となろう」

奴隷は主君に対し、無言で跪拝した。